

42462

教科書文庫

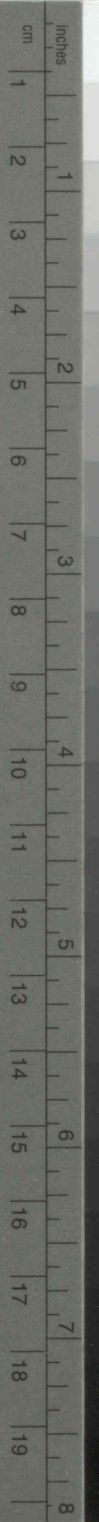
4
810
42-1943
200030
1756

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
H27
資料室

女子新國文

新改制

卷八



資料室

375.9
Ha7

文部省檢定濟

昭和十八年七月十三日 高等女子學校實業國語科

女子新國文

改制
新版

文學博士芳賀矢一編
東京帝國大學教授
文學博士橋本進吉訂補

中等學校教科書株式會社



女子新國文 改制新版 卷八

目次

一 鹿 笛(俳句新調).....	二
二 百蟲譜.....	横井也 有.....六
三 美しき故郷.....	矢代幸雄.....一〇
四 郷土の魅力.....	相馬御風.....一六
五 奈良懐古.....	中村孝也.....二四
放送局だより(自修文).....	仲木貞一.....三三
六 四季小品.....三九
一 春 雨.....	中島廣足.....五九

目次

一	風鈴	香川景樹	四〇
二	さぬた	清水濱臣	四〇
三	冬のこゝろ	伴蒿 蹊	四
四	狐塚(狂言)	(續狂言記)	四
五	道まなぶ人	松平定信	四
六	道まなぶ人		四
七	人を見るに心得べきこと		四九
八	目しひし者		五〇
九	下を恵む道		五〇
一〇	志		五三
一一	鷹の羽にすむ蟲		五三
一二	冷(詩)	正富汪洋	五

一〇	熊野落	(太平記)	五
一一	長柄堤の訣別(戯曲)	坪内逍遙	三
一二	國劇展開の跡(自修文)	河竹繁俊	三
一三	方丈記	鴨長明	三
一四	うたかた		三
一五	安元の大火		八
一六	養和の飢饉		六
一七	わづらひ		七
一八	閑居		八九
一九	平安京	藤岡作太郎	三
二〇	行宿梅	(大鏡)	九七
二一	蘭學開眼		九九

一六 隅田川(謡曲)……………一〇七

能面の趣味(自修文)……………二六

一七 小野の御室……………(伊勢物語)一三〇

一 小野の御室……………一三三

二 東下り……………一三三

一八 姫小松(今様)……………一三六

一九 美術に現れた日本國民性……………藤懸靜也一三七

二〇 節供と家庭……………倉橋惣三一三九

二一 臺所の經濟說……………森本厚吉一四四

二二 母としての日本婦人その一……………鶴見祐輔一五三

二三 母としての日本婦人その二……………鶴見祐輔一五九



大楠公

豹ハ死シテ皮ヲ留ム豈偶然ナランヤ

湊川ノ遺跡水天ニ連ナル

人生限り有り名ハ盡クル無シ

楠氏ノ精忠萬古ニ傳フ

旗持ももらひ泣きする湊川

梁川 孟緯

(古川 柳)

女子新國文

改制
新版

卷八

鳴雪
内藤素行。松山市
の人。大正十五年
歿。年八十。

一 鹿 笛

元日や一系の天子富士の山
夕月や納屋も厩も梅の影
おさがりになるらん旗の垂れ工合
すみれ程な小さき人に生れたし
春雨や傘さして見る繪草紙屋
山門に雲をふきこむ若葉かな
春風や役者のせたる葛籠馬
草市の一夜露けき都かな
生きかはり死にかはりして打つ田かな

鳴雪
漱石
子規
松宇
鬼城

松宇
伊藤半次郎。安政
六年(一八五九年)
信濃(長野縣)に生
れた。
鬼城
村上莊太郎。高崎
市の人。昭和十三
年歿。年七十四。

石鼎
原鼎。明治十九年
島根縣に生れた。

竹冷
角田眞平。静岡縣
の人。大正八年歿。
年六十四。

酒竹
大野豊太。熊本縣
の人。大正二年歿。
年四十二。

露涼し形あるものみな生ける
野を焼いて歸れば燈下母やさし
新涼や佛にともし奉る
梅雨凝つて四山暗さや軒しづく
山の色釣りあげしあゆに動くかな
釣るゝとも見えぬ小舟や行々子
雨來らんとして頻りにあがる花火かな
夕立や金鼓山河を動かして
朝顔や桓にからまる風の色
立秋の大鐘つくや瘦法師
埋火の夜は更けけらし竹の雪

虚子
石鼎
紅葉
竹冷
酒竹

繞石
大谷正信。松江市の人。昭和八年歿。年五十九。

青々
松瀬彌三郎。大阪市の人。昭和十二年歿。年六十九。

紫影
藤井乙男。國文學者。帝國大學博士。京都帝國大學名譽教授。明治元年兵庫縣に生れた。

乙字
大須賀績。福島縣の人。大正九年歿。年四十一。

句佛
大谷光演。明治八年京都市に生れた。

鹿笛の一つは谷に下るらし

繞石

一山にひゞく魚板や秋夕べ

朝寒の胸ふくらせし雀かな

小波

大雪の海に消えこむ静かさよ

野分してけもなくすみぬ水や空

青々

ひゞの手を拭へばあたる薄日かな

落葉ふる音ひとしきり大伽藍

紫影

朝朗御所の空なるあげひばり

木揺れなき夜の一時や霜の聲

乙字

千足袋の日南に氷る寒さかな

冬空や畑の遠きに青きもの

句佛

ゆく年や誠をまもる一心事

○

羽子板の重きが嬉しつかで立つ

かな女

空濠にひゞきてしひの降りにけり

たんぼゝを折ればうつろのひゞきかな

より江

猫の眼に海の色ある小春かな

引く潮に砂利鳴る音や夏の月

あふひ

しぐるゝや灯待たるゝ能舞臺

雪道や降誕祭の窓明り

久女

露草や飯噴くまでの門歩き

久女
杉田久子。明治二十五年鹿兒島縣に生れた。

あふひ
本田あふひ。明治八年京都市に生れた。

より江
久保より江。明治十七年松山市に生れた。

かな女
長谷川かな。明治十年京都市に生れた。

二百蟲譜

横井也

蝶の花に飛交ひたる、優しきものの限りなるべし。それも啼く音の愛なければ、籠に苦しむ身ならぬこそ、なほめでたけれ。さてこそ、
横井也

庄周が夢も、このものには託しけめ。
蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ、幸なれ。隴月夜の風静まりて、遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで翁の目覺したれば、このものの事、更にも誇りがたし。

蟬はたゞ五月晴に聞初めたる程がよきなり。稍日盛に啼きさかる比は、人の汗絞る心地す。されば、初蝶とも、初蛙とも言ふ事を聞かず、このものばかり初蟬と言はるゝこそ、大きな手がらなれ。やがて死ぬけしきは見えずと、このものの上は、翁の一句に盡きたりと、いふべし。

横井也有
江戸時代中期の俳人。俳文にすぐれてゐた。名は時敏、半掃庵と號した。天明三年(一八四三年)歿、年八十二。
庄周が夢
莊子に「昔莊周夢に胡蝶となる云云」とある。
古今の序に云々
「花になく驚水にすむ蛙の聲をきけば、生きたし生けるものいづれか歌を詠まざりける云云」(古今集序)
古池に云々
「古池やかほづとびこむ水の音」(芭蕉)
やがて死ぬ云々
「やがて死ぬけしきは見えず蟬の聲」(芭蕉)

五月の 闇はた
だこの ものに
爲にや
貧の學者
晉の車胤。

筑紫の 人の
このもの にな
りたり
あはれは 劣る
べからず



(筆市東藤内) 有也 井横

螢はたぐふべきものもなく、景物の最上なるべし。水に飛交ひ、草にすだく。五月の闇はたゞこのものの爲にやとまでぞ覺ゆる。然るに貧の學者にとられて油火の代にせられたるは、このものの本意にはあらざるべし。歌に螢火と詠ませざるは、殊の外の不自由なり。俳諧にはその眞似すべからず。

ひぐらしは多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕べは草に露おく頃ならん。

つくづく、ぼふしといふ蟬は、つくしこひしとも言ふなり。筑紫の人の旅に死して、このものになりたり。と世の諺に言へりけり。あはれは蜀魂の雲に叫ぶにも劣るべからず。

蟹の生涯は世の爲に終り、火取蟲はたが爲に身を焦すにか。
蜉蝣ははかなきためしに引かれたで食ふ蟲は物好の謗となれり。

同じ寶の名に呼ばれて、玉蟲は優しく、こがね蟲は卑し。

蝸牛はたゞ水にあるべきものの、いかで草葉に遊ぶらん。家は持

賦筆有也

ちたれども、行く先々を負ひ歩くは、水雲の安きにも似ず。

蟹の歩みに譬ふべきものこそなけれ。たゞ原、吉原を駕籠に乗りて富士を詠め行く人には似たり。

機織、鈴蟲、くつは蟲は、その音の似たるをもて名に呼べり。松蟲のその木にもよらで、いかでかく名を附けたるならん。毛生ひむくつ

蝸牛はたゞ水にあるべきもの
夏をむねと造れば庵に野分かな
也有

原、吉原
原は駿河國(静岡縣)駿東郡。吉原は同富士郡。共にもと東海道五十三次の一。
松蟲のその木にもよらで、いかでかく名を附けたるならん

けき蟲にも同じ名ありて、松を枯し、人にうとまる。一つ在所に二人の八兵衛ありて、一人は後生を願ひ、一人は殺生を事とす。これ松蟲のたぐひなるべし。

きりくすのつゞりさせとは、人の爲に夜寒を教へ、藻にすむ蟲はわれからと、たゞ身の上を歎くらんを、蓑蟲のちよと呼ぶは、いと優しげなり。されど、父のみこひて、なかは母を慕はざるらん。

蚊は憎むべき限りながら、さすが卯月の比端居珍しき夕べ、始めてほのかに聞きたらん、または長月の比力なく残りたるは、寂しき方もあり。蚊屋つりたる家のさま、蚊遣たく里の煙など、且は風雅の道具ともなれり。蚊蚊は殊にはげしきを、かの七賢の夜話には、いかに團扇の暇なかりけん。

(鶉衣)

つゞりさせ云々
「秋風に結びぬらし藤袴つゞりさせてふきりくすなはく古今集、在原禊野」
藻にすむ蟲の云々
「あまの刈る藻にすむ蟲のわれからと音をこそ鳴かめと世をば怨みじ(古今集、藤原直子)」
ほのかに 聞き
たらん

七賢
晉の符康の交つた奇士阮籍、山濤、向秀、劉伶、阮咸、王戎。いはゆる竹林の七賢である。

矢代幸雄
畫家、評論家。東
京美術學校教授。
明治二十三年横濱
市に生れた。

蘆の湯
箱根山中にある。

湯の花澤
蘆の湯から約一キ
ロメートル半。

貫之

銀緑の葉は細長い波
打つてゐました

こゝに 高原の
銀色と言ふのは
薄原の事です

三 美しき故國

矢代 幸雄

幾年目かの秋を日本に迎へて、忘れたものに再び出逢つて珍しくてしやうのないやうに、日本の秋は美しいなと思ひました。平野にはまだ夏の名残が暑く溜つてゐる九月初に、昔行きつけた蘆の湯へ登つて行きました。薄が見たかつたからです。湯の花澤へかけての高原を秋風が渡つて、銀緑の細長い薄の葉は、貫之の草書の亂れがきは、かうもあらうかとばかり波打つてゐました。湯の宿に滞留してゐるうちに、目に見えて秋が惜しくなつて行きました。今日は寒いと思つて高原へ出ると、高原の銀色は見違へるやうにさえて來ました。こゝに高原の銀色と言ふのは、私の好きな薄原の事です。絹絲のやうな穂の藤紫から紅が褪せて、凄愴としてさえた光がまさつて來たのです。そこに秋風が波打たせてゐました。

日本をほめる爲に外國を悪く言ふ言ふ氣はいたしません

でも日本の秋はまた無上に綺麗です

ねごめ物語繪卷
今残缺一卷。秋元
子爵家の蔵。秋元
者、製作年代共に
不詳。

日本は綺麗な國だと思ふのです。日本をほめる爲に外國を悪く言ふ氣はいたしません。たゞ日本はほんたうに綺麗な國でした。去年の秋はイギリス、一昨年の秋はイタリー、その前の秋はスウイスからドイツを通つてイタリーに歸る、もう一つ前の秋はフランス、スペインを遊び過ぎて、秋ももう深い頃イタリーに歸つた。自然はどこも美しい。秋の空が時雨れても、初冬の空がからりと晴れても、國にその國特有な美しさがある。でも日本の秋——それはまた無上に綺麗です。

秋ばかりではありません、日本の春も殊にさうです。今年、京都から中國、九州へと旅して見ました。櫻の花と菜種の花とが到る所満開でした。菜種が野を黄色く、だんだら縞にすると、櫻は山を鹿子斑にします。土佐繪の夢です。よく古土佐の繪巻物には、例へば、ねごめ物語繪卷の見返に、一面に櫻の花が咲いて、細い枝と幹と星

あれを：自然の
圖案化裝飾化と
言ひます

あれが 日本
象の 相：印
自然の 象です

經卷
長寛二年(一八二
四年)夏の末に奉
納。三十三卷。



運見の巻繪語物のめざね

たものではありませぬ。あれが日本
の自然の相すがた、そのすなほな日本人
の心への印象です。久しぶりに日本
の春を歩いて、私は古土佐の繪巻物
の國を歩くと言つたやうに、華やか
に、そして寂しく浮れました。

それから秋、秋と言へば、この間ま
た平家の嚴島へ納めた經卷を見ま
した。あれは銀の藝術です。金光眩い佛畫の彩色から、王朝時代の莊
嚴藝術が生れる。金莊嚴が洗はれ白く練れて艶麗となり、纖巧とな

嚴島經卷を見な
がら私は：心
地がしました

歐洲の 秋の 野
露の 面白さを
私は 知りません

西洋の 草場は
遠見が：綺麗な
だけです

り、遂に銀色の涼しい夢となる。嚴島經卷を見ながら、私は華麗な神
經質の王朝の秋を見たやうな心地がしました。日本の秋の一相が
確かにそこにある。經卷のうち勸持品でありましたか、料紙裏に、銀
地に群青色のききやうの花が、小さい星のやうに寂しさうに描い
てありました。銀河に明るい秋の夜に、見えない小さい星を懐かし
む、それともまた萩薄にしつとりと置かれた白露の圖と言ひませ
うか。歐洲の秋の野に銀の光の露の面白さを私は知りませぬ。あち
らの牧場はいち早く刈られて、枝垂れ靡く草の葉がないからでせ
うか。牧畜が盛んで、おいしい草は刈られないうちに、もう放牧の牛
と羊とに根本まで綺麗に食べられてしまふのですもの。西洋の草
場は遠見が毛氈を敷いたやうに綺麗なだけです。運動場の芝生の
通りです。

日本の秋の野は曲線模様です。物狂はしい旋律です。また薄の事

池上、馬込
共に今東京市大森

秋の午後
寂滅 無風の

宗達
野村宗達。畫家。能登の人。古土佐の風を慕つて一派をなした。寛永二〇三年(一六四五年)頃の人。
光悦
本阿彌光悦。畫家。また刀劍鑑定家。寛永十四年(一六三七年)歿。年八十一。

を言出しますが、武藏野は土壤の肥えてゐるせゐるか、大きな、作つたやうな薄が、よく大根畑にはさまつて生えてゐます。私の住む大森から池上、馬込の方へかけては、新開地の家の建ちかけた空地に、思ひがけなく昔の武藏野の形見かと思はれる程りつばな薄が、縦横に曲線幻想を逞しうしてゐる事があります。秋の午後、寂滅のありがちな、無風の寂滅と言つたやうな静かな光の中に、幻想の薄はこの世ならぬ淨光そのものになります。のどやかな日影は長い葉を銀條に、長い穂を金絲に輝かして、金銀の豪華な花火を落日の前に揚げ、そして寂しくなつてゐるやうです。

其所に、いつそのこと月があればと想像するのは、私の心が武藏野の秋の薄の記憶から、何時の間にか宗達の繪模様の中を歩いてゐるせゐるでせう。宗達はその師光悦が新古今の歌を書附ける巻物の料紙に、金銀泥で四季の花と草とを思ふさまに描いた事があり

ぼかつと 大きな
月が... 浮びま
した

高原に 雲垂れて
蕭條として 確かに
薄は 泣かせ
ます 詩人を

ます。名筆を懐かしんで巻物を繰つて行くと、藤つゝじの咲く夏景色から、繪巻が秋に入つて行く。萩原から薄原、大きな薄が秋いつばいに亂れたかと思ふと、一卷の中心點のやうに、ぼかつと大きな月が、薄の向ふに、薄模様を著ながら浮びました。はか／＼しいやうです。お伽噺の月よりも不思議です。繪模様の國ならこそあんなに美しい月が出る。薄の美しさ。それは風に靡く風情をのみ昔から歌はれます。高原に雲垂れて蕭條として靡く薄は、確かに詩人を泣かせます。けれども、無風に寂光に浸つて曲線の迷走を恣にする薄もまた、一つの夢の花です。亂れた詩想の收めやうもない耽美です。西洋の景色が西洋の食物のやうに、どこか大味のやうな氣のするの私だけでせうか。スイスは綺麗だけれども、掃除したやうな綺麗さです。イギリスの田舎は平遠閑雅、綠蔭に清流緩やかにめぐつて、ちやうどやうまく白鳥が浮んだりして、えも言はぬ眺です。けれ

ナポリ
イタリー南部の都
市で海港。その風
光はヨーロッパ第
一と稱せられる。

相馬御風
詩人。評論家。名
は昌治。明治十六
年新潟縣に生れた。

古人も多く旅
に死せるあり

ども、何だかぢきにあきてしまふのは、やかましくほめられる英國の風景畫にあき易いのと、大した違はありません。イタリーの青空は眼も痛いくらゐ鮮かです。ナポリの白い建物の尖端をしつくりと限る濃藍とも、紺青とも、群青とも言ひやうのない永遠相の空も、瞥見的感銘の激しいわりに、あとに残る感じは大きつばです。何故でせう、

四 郷土の魅力

相馬 御風

郷土といふものの人間の心を引附ける作用は、今更ながら不思議なものである。一方に、月日は百代の過客にして、行交ふ年もまた旅人なり。船の上に生涯を浮べ、馬の口とらへて老を迎ふる者は、日旅にして旅を棲所とす。古人も多く旅に死せるあり。余もいづれの年よりか片雲の風にさそはれて、漂泊の思やまず」と言ひ、或は

代々の賢き人
人も故郷は忘
れがたきもの
におもはえ侍
る由

「羈旅邊土の行脚、捨身無常の觀念、道路に死なん、これ天の命なり」などと言つてゐたかの芭蕉翁でさへ、他方に於ては

「代々の賢き人々も故郷は忘れがたきものにおもほえ侍る由。我、今は初の老も四とせ過ぎて、何事につけても昔の懐かしきまゝに、はらからのあまた齡傾きて侍るも見捨てがたくて、初冬の空のうち時雨るゝ頃より、雪を重ね霜を経て、師走の末、伊陽の山中に至る。なほ父母のいまそかりせばと、慈愛の昔も悲しく、思ふ事のみあまたありて、

ふるさとや臍の緒に泣く年の暮
などと言つてゐる。

ふるさとは蠅まで人をさしにけり

ふるさとは西も東もばらの花

といった風に、永い間自分の故郷を詛つて、旅から旅へと漂泊して

柏原
長野縣上水内郡柏原村。
良寛和尚の如きも
：孤獨な庵住
生活に續けて
静かな往生を
遂げてゐる

みた、あのすね者の俳諧寺の一茶ですら、晩年には
これがまあつひの棲所か雪五尺
などと驚きながらも、その雪の深い信州柏原の郷里に歸り住んで、
其所で一生を終へた。

更にかの近世稀有の聖僧と言はれる越後の良寛和尚の如きも、
二十二歳から四十三歳までの二十餘年間の雲水行脚の旅にあき
たらぬで、それ以來ずつと越後の郷里に孤獨な庵住生活を續け
て、静かな往生を遂げてゐる。

ふるさとへ行く人あらばことづてん

けふ近江路をわれ越えにきと

草まくら夜ごとにむすぶやどりにも

むすぶは同じふるさとのゆめ

などといふ彼の旅中の歌を讀んでも、いかに彼が故郷を慕ふ思の

柴の庵のかしら
しと 都へかへら
じと おもはんだ
べしもおはれなる

彼等の生れ且
土に育てられた郷
對しては

切なものであつたかを察する事が出来る。二十三歳で妻子を振捨
てて佛門に歸し、諸國修行の旅に出た西行も、

柴の庵のしばし都へかへらじと

おもはんだにもあはれなるべし

世の中を捨てて捨てえぬ心地して

みやこ離れぬわが身なりけり

などと歌つてをり、且晩年には都に歸つて死んだ。

かういつた風に、昔から代表的な漂泊の人々として知られたこ
れ等脱俗の人さへも、不思議に彼等の生れ且育てられた郷土に對
しては、しかく切な愛慕の情をもつてゐた。抑、この郷土の人間に對
してもつてゐる魅力は、どこから來るのであらうか。

抑、郷土が私たちの心を引附ける點は、どういふところであるか。
その地の自然が、他のいづれの土地よりも風景の美に於てすぐれ

人情が特に他の土地のいづれよりも醇美である言ふに

てゐる爲かと言ふと、必ずしもさうではない。人情が特に他のいづれの土地のそれよりも醇美である爲かと言ふに、それも然りとは言へない場合が少くない。それでは何か特別に自分の生活に都合のいゝ外的條件がある爲かと言ふに、それも必ずしもさうばかりとは言へない。さうかと言つて私たちは、理智的に考へて、故郷といふものは大切なものだと言つて明白に判断してから後に、故郷を慕つてゐるとは尙更考へられない。

然らば、人々は何故に自分の郷土といふものに心を引かれるのか。それは全く「何とはなしに」である。理智的判断によるのではなく、功利的見地からでもなく、或は特に美的判断が然らしめるといふのでもなく、それはたゞ「何とはなしに」である。郷土の人心を引附ける魅力は、實にこの何とも言つて見やうのないところから發する。それは自然と人間と、過去と現在とを一つに融した一種不思議な

それは全く「何とはなしに」である
何とはなしに

私たちが郷土を慕ふ心は、全く内心の自發的情緒である

音樂的な、詩的な魅力である。また私たちが郷土を慕ふ心は、全く自分にもよく分らない内心自發の情緒である。いかなる力を以てしても否定しがたい本然的情緒である。この不可思議な情緒の存在してゐる事實は、恐らくいかなる理智の人と雖も、否定する事は出來ないであらう。

けれども、今の時代には、追々この自分の郷土といふものを失ひつゝ、ある人が多くなりつゝ、ある事も、また明らかなき事實である。

私は曾て、漁夫にとつて海は單に彼等に生計の資を與へる爲のみの場所ではなくして、また實に彼等にとつての貴い心の糧を與へる領土であるといふやうな事を書いた事がある。全く漁師ほど海を愛する事の切な者はない。それは海は彼等にとつては離れがたい心の世界である。農夫にとつて山野田畑が單に彼等の生計の資を得る場所でないと同じである。

漁師ほど切な者はない

今の時代には、
人が多くなりつゝある

農夫が：考へる
農時：農夫は
靈の郷土を
ふのである
失心る

外に愛慕すべき郷土を失ふ事は、同時に内に心靈の故郷を失ふ事である。漁師にとつて、海は單に生計の資を得るのみの場所と考へられる時、漁師は即ち心の故郷を失ふのである。農夫が山野田畑を生活の爲の資を得る場所とのみ考へる時、農夫は心靈の郷土を失ふのである。

西洋の或新しい女の哲學者の書いたものの中に、こんな一節があつた、

「ロシヤとの戦争中、粗末な米の飯をありがたがつてゐた日本の兵士は、何かの機會にわづかばかりの草花でも見ると、ヨーロッパの遠足家のそれにもまして、一種の精神的更新を感得したといふ事である。一體、ヨーロッパの遠足家は、無慈悲にも自然の最も美しい春の著物であるところの草花を汚したり、さまざまの樹木や記念物を傷つけたり、卓子や椅子などにまで容赦なく自分の

日本の兵士
は：一種の
精神的更新
を感得した

私たちは：事實
を知らない

私たちの傷つ
た心は、取戻す
健康を出來る
事が出來る

つまらない名前などを彫附けたりなどして、彼等自身を楽しませてゐるやからである。

私たちは一般のヨーロッパ人が、それ程自然を愛し得ない人たちであるかどうかの事實を知らない。しかし、私たち日本人が一般に自然を愛する切な心をもつた民族である事實は、信じて疑はない。自然は何と言つても私たちの心の故郷である。脚氣患者が郷里に歸る事によつて、何時とはなしに健康を恢復する事が出来るやうに、私たちの傷ついた心は、魂は、心の底から自然を愛し、自然を懐かしむ事によつて、その健康を取戻す事が出来る。

自然を魂の郷土として懐かしむ事の出来る幸福を、私たちは永遠に失ひたくない。私たちは自分にも、また自分の子どもたちにも、永遠に「郷土」の有する魅力を失はせたくはない。それは私たちの爲の搖籃であつて、また墳墓であるべきである。

(對山雜記)

桓武天皇
第五十代。

奈良の都は、
榮えて、芳香を
放つてゐる。

翌々年
和銅五年（一三七
二年）正月。

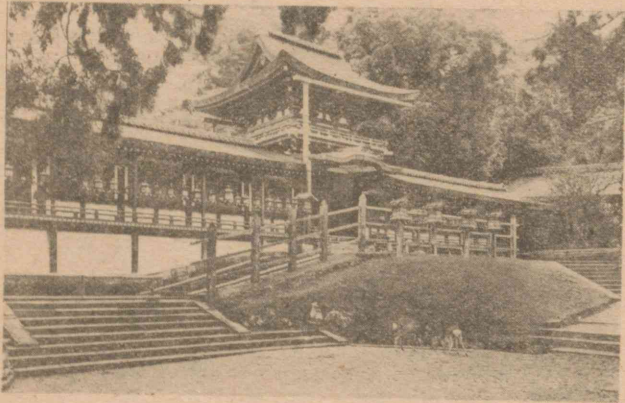
天平十八年
一四〇六年。

りなり、東西南北の街路井然として紊れないものであつた。それより元正、聖武、孝謙、淳仁、稱徳、光仁の六天皇を經、桓武天皇の初に至るまで七十餘年の間、奈良の都はまことに咲く花の匂ふが如くに榮えて、文學にも、美術にも、永へに芳香を放つてゐる。

今にして回顧すれば、それはさながら美しい繪卷に外ならない。都の移された翌々年の冬、太安麻呂は敕を奉じて古事記を撰した。風物荒寥たる大和盆地北邊の山河、邸宅のなほ疎らな新都を包んで、粗野な感じの満ちてゐる所、霜の白い朝、月の傾く夕べ、蕭條たる景色を眺めながら、西の方生駒の山陰に落ちて行く、晷影を憾みつつ、夜を日に繼いで、功程を急いだ人々の衣の袖に、霜夜のこぼろぎが音もなくとまつたかも知れない。聖武天皇が大佛建立の御志を立てさせられてから幾年月が流れて、天平十八年十月漸く燃燈供養を催された時の御有様、それは冬の初であるから、樹々の梢はも

春日山
添上郡春日郷の東
にある名山、海拔
五〇〇メートル。

聖武天皇の御側
には、光明皇后
の御姿を常に
仰ぎ見るので
ある。



はや色づいたでもあらう。春日山西麓の鬱蒼たる林間に、燃きつら

社 神 日 春

ねた一萬五千七百餘杯の燈明が、風に揺いで、隠顯する。錦繡の衣を華やかに装うた數千の僧侶が、長蛇のやうな列を作り、脂燭をかゝげて、讚歎供養しながら三たびめぐる。梵唄の響、誦經の聲、さながら淨土を見るやうな莊嚴華麗な光景であつた事であらう。

聖武天皇の御側には、日に配せられる月のやうに、美しくも貴い光明皇后の端麗比ひなき御姿を、常に仰ぎ見るのである。皇后は篤く佛教に歸依あらせ給ひ、慈悲の御思深くわたらせられ、悲田院を設け、施藥院を置い

て、孤兒や貧民などを恵み給ひ、數多くの美しい物語を残させられた。

萬葉集には

わが背子とふたり見ませば幾何か

この降る雪のうれしからまし

といふ皇后の御歌を収めてある。これは雪の降る日に天皇に奉つた御歌である。

聖主賢后のこのやうに豊かな人間味をもたせ給うた事が、この上もなく嬉しい。

果てしなき思出を胸に懐いて奈良に遊ぶ者は、停車場より直ちに公園に向ふであらう。

興福寺の五重塔を左に、猿澤池を右に見て奈良帝室博物館を訪

わが背子と云々
卷八、相聞に見え
る。
見ませば……うれ
しからまし

奈良帝室博物館を
訪れ、ぼ……夢
が漂ふのを 覺
える

運慶
康慶の子。初め京
に住し、後鎌倉に移
つた。世にいはゆる
鎌倉佛師の祖。ゆ
る鎌倉天皇から順
徳天皇へ一八四六
一八八〇年頃
までの人。
快慶
康慶の弟子。佛師
の巨匠として運慶
と並び稱せらる。

れ、ば、藝術の粹を蒐めた室ごとに、遠く千年の昔の夢が漂ふのを 覺える。

菊の香や奈良には古き佛たち

芭蕉

天平の古佛には、えならぬ氣高さと懐かしさとがある。やがて東大寺に足を運べば、名高い南大門の二王像にまづ眼を見張る。これは鎌倉時代の初、運慶、快慶といふ名工が、多くの弟子を率ゐて造つた巨像であつて、體勢雄偉堂々として威風四邊を壓する趣を備へてゐる。

この二王に門を衛らせて、金堂の直中に安坐まします盧遮那佛は、奈良の大佛として名聲海の内外に遍く、慈眼を垂れて一切衆生を憐ませ給ふ御相好、貴しとも貴し。

昔はその後方に講堂があり、その左右に東塔、西塔があり、七堂伽藍儼として存してをつたが、たびく兵燹に罹つて、ありし世の面

公園の鹿はよく人に馴れて、餌を求めながら徘徊して来るのが愛らしい。春日神社の神鹿として古へから崇められ、保護されてゐる。一の鳥居より奥、老樹の鬱蒼として生ひ茂る所、苔むした石燈籠の限りもなく路の両側に立並んでゐる傍、どこに行つても彼等の人懐かしげな姿を見ぬ事はない。興福寺は藤原氏の氏寺。春日神社はその氏神。昔此所の僧兵共が春日の神木を奉じ、武装して朝廷に強訴しまゐらせた時にも、彼等の祖先は、その優しげな眼を舉げて、遠くまで見送つたであらうと思へば、そゞろにほゝゑまれる。

どこに行つても事は無い

強訴した時 まゐらせ

明州 今の支那浙江省の鄞、もとの寧波。唐の時代に我が遣唐使は此所に上陸した。

影はうつろひ、三月堂や正倉院が多くの珍寶を藏めて、懐古の情をそゝるばかりである。
公園の鹿はよく人に馴れて、餌を求めながら徘徊して来るのが愛らしい。春日神社の神鹿として古へから崇められ、保護されてゐる。一の鳥居より奥、老樹の鬱蒼として生ひ茂る所、苔むした石燈籠の限りもなく路の両側に立並んでゐる傍、どこに行つても彼等の人懐かしげな姿を見ぬ事はない。興福寺は藤原氏の氏寺。春日神社はその氏神。昔此所の僧兵共が春日の神木を奉じ、武装して朝廷に強訴しまゐらせた時にも、彼等の祖先は、その優しげな眼を舉げて、遠くまで見送つたであらうと思へば、そゞろにほゝゑまれる。

阿倍仲麿は唐より歸朝しようとして、明州の海邊に立ちながら、「あまの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」と歌

月の登るのを見れば誰しもあはれを覺えるであらう

唐招提寺

律宗の本山。生駒郡跡村字五條。天寶三年(一四九一年)唐僧鑑真的創立。

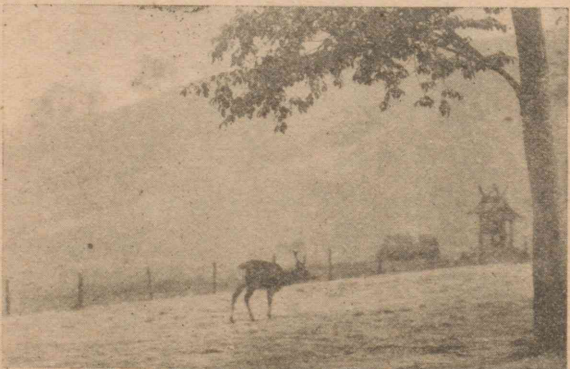
藥師寺

法相宗の本山。唐招提寺の北にある。白鳳中(天武天皇の御願によつて飛鳥に開創された)三七八年(現地に移した)。

菅原寺

喜光寺を言ふ。法相宗生駒郡伏見村字菅原にある。養老五年(一三八年)の創建と言ふ。

つた。懐郷の思の切なさが、身にしみくとしみわたるのを感じる。その山に月の登るのを見ては、誰しもあはれを覺えるであらう。その月は、今は田園となつた舊都を一面に照す。北の方、大極殿の遺址より南を眺めれば、大和の山川はたゞ一眸の裡に集り、帝都經營の精神の雄大なのを感じ得るに餘りがある。道路の規則正しく縦横に交錯してゐるのは、昔の街路の名残を留めてゐるのである。その西邊を西の京といふ。唐招提寺、藥師寺、菅原寺などの名刹が並んでゐる。月の夜にも宜し、花の曙にも宜し、四季をりくくの風情は、何時も旅客の心を捉へるのである。



山 草 嫩

何時遊んでも
詩興畫趣の盡き
ない

をりから... 聲が
聞える

私は 覚え
ずさんだ 口

仲木貞一
劇作家。元東京中
央放送局社会教育
課長。明治十九年
金澤市に生れた。
本文は特に本書の
爲に執筆したのも
の。

それは何時遊んでも詩興畫趣の盡きない所である。そのうちで
も秋の風情はまた一入である。古き都を追憶する心には、寂しさの
伴なふ方がしんみりするからであらうか。木々の梢の色づく頃、明
月の影を踏んで嫩草山の麓に立てば、滿地の露清光を宿して、氣も
心も澄みわたるばかり。をりからいづこよりともなく友呼ぶ鹿の
聲が聞える。切々たる哀音が木立の間に消えて行く時、遠い故郷の
想念が夢のやうに浮ぶ。私は覚えず口ずさんだ、

牡鹿なく舊都の秋の寂しさに

ゆめよ昔の友をしぞ思ふ

秋になると、今でもその鹿の鳴く音を思ひ出すのである。

自慊文

放送局だより

仲木貞一

新郷
埼玉縣北足立郡新
郷村

放送局
正しくは日本放送
協会の関東支部中央
放送局愛宕山演奏
所と稱する。今は
麹町區内幸町●新
郷に移った。

拜復。御手紙忝く拜見致しました。
何年ぶりかで私の聲をラジオを通してお聞き下さつたとの
事、恐縮に存じます。

さて、お問合せの放送局の様、並びに放送する時の様子など、
私の見聞した限りに就いて簡単に申し上げます。封中の繪葉書
にあります亭々として聳えてゐる大鐵塔は、恰も帝都の入口の
大門かと思えますが、實は芝區愛宕山上に立つてをりますアン
テナです。それも今では過去の記念物として残されてゐるだけ
で、ほんたうに電波を出してゐるアンテナは、埼玉縣の新郷放送
所といふ所にあります。それは十キロ以上の電波を都市内から
放射する事は禁じられてゐるからで、東京ばかりでなく、古屋、
大阪など十キロの電波を出す所は、皆都心から十マイル以上距
つた所に大アンテナを樹てる事になつたのです。
ところで、この東京の放送局は、愛宕公園内にあるコンクリー

放送局だより(自修文)

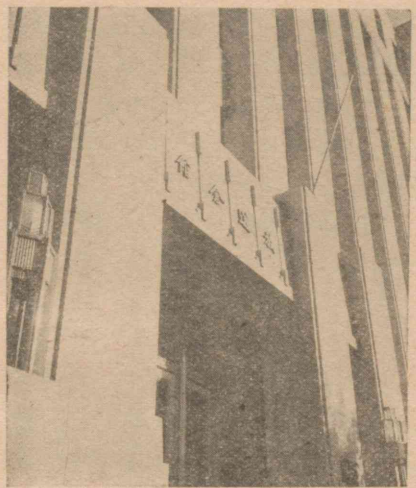
舊芝離宮
今恩賜庭園。大正
十三年攝政宮殿下
御成婚記念として
東京市に下賜
された。
水天髻髷
水と空とがつかぬ
て見わけのつかぬ
こと。

櫛比する
密に立並ぶ。

瑞雲
めでたい雲。

巍然
高く大きいさま。
大倉集古館
赤坂區葵町。男爵
大倉喜八郎の寄附
た。和漢の美術工
藝品を陳列してあ
る。

トの近代式の建物で、帝都の西南部を一眸のもとに收める形勝の地を占め、近くは舊芝離宮の森を越して東京灣を眺め、その遙か彼方に房總の山々が水天髻髷の間に浮んでゐるのを望みま



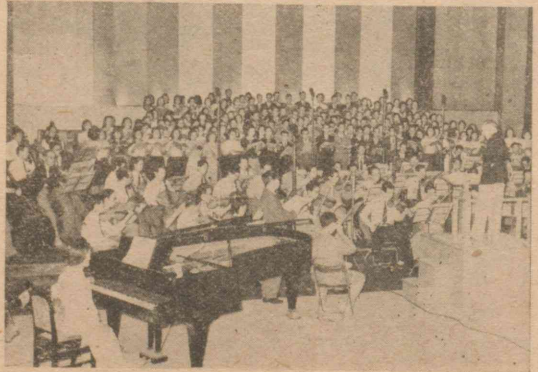
放送局新館の外観

す。東北方に當つては丸の内、日本橋、銀座などの大厦高樓が櫛比してをり、その向ふに本所、深川、浅草などの家屋が霞んで見えます。

更に北方へ眼を向けると、老松の緑濃き宮城のほとりに瑞雲たなびき、その西方には、巍然として雲表に聳える新貴衆兩院の高塔、諸官衙の尖塔、さては支那の宮殿かと思はれる大倉集古館の朱塗の大建築などが、緑樹の間に散見します。かうした眺を

恣にしながら放送をする事が出来るのです。

放送室には、西洋音楽やラジオドラマを演ずる大きな室と、日つと小さな講演室との三室があります。これ等の室に備へてあるマイクروفオンを通じて、歌や言葉は中央の調整室に導かれ、其所で音の加減をして、一方は新郷の放送所に、他方は地方の放送局に、地中線によつて聯結されるのです。これは、關東地方及び日本全土に向つて電波が放射される場合ですが、外國に向つての放送は、太平洋沿岸にある無線電信發信所に、有線で聲や歌が送られ、其所から海外へ向つて放射されるのです。その電波は、一秒間に地球を七周半す

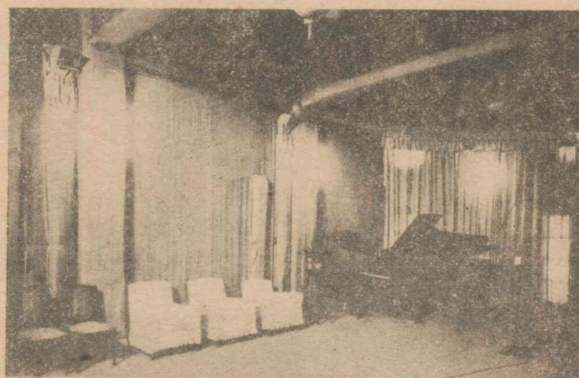


放送中の放送室(新館内)

マイクروفオン
(擴聲送話器)

放送局だより(自修文)

反響音
音響が障壁に當り
反射して二重に聞
えるもの。



放送室 (舊館)

る程の速さでありますから、ロンドンやニューヨークの放送局に
どんな工合に感じられたかは、それ等の局から反對に放射され
た電波を、此所で受取つて見て、直ちに
判断されるのださうです。

放送室の内部は、厚いフルトや布で
四壁を包んであります。それは、四壁に
ぶつかつた反響音が、原音よりごく少
し後れてマイクロフォンにはいると、そ
こに音の混乱を來し、きたない音とな
るからです。人間の耳だと、不用の音は
取除けて、入用の音だけを聴取る事が
出來ますが、機械はさう都合よくは働
いてくれません。そこで遠くを走る汽
車の汽笛も、マイクロフォンは感ずるので、放送室の硝子戸は、皆二

重になつてゐます。なほ反響音をなるたけ取去るやうに出來て
ゐる結果、拍手、拍子木、太鼓の音など反響音で味はひを出してゐ
る音は、餘り良い結果を示してをりません。

さて、マイクロフォンに向つて言葉を發する時の情況を申しま
すと、誰も聞手のゐない所で、獨りでものをしやべる時の變な氣
持は、實驗者でないと到底想像されません。しかも、反響が殆どあ
りませんから、自分の聲を自分で聞く事が出來ず、出來ても、深い
洞穴に向つて聲を發してゐるやうなもので、まことに不氣味な
ものです。しかし、馴れて來ると、數百、數千の人々が目の前で聞い
てゐるやうに思へて、卻つて面白いと申します。樂器を用ひる場
合、馴れてゐないと、樂器から出る音が普通と變つて聞える爲、ち
よつと、めんくらふ事があるとの事です。私が放送をした時、すぐ
その後で、隣の大きな室で音樂の演奏がありました。が、マイクロ
フォンの周圍を近く遠くさまざまの樂器を携へた人々が圍んで

擬音
ほんたうの音に
せてつくる音。

株式市況
株式取引所に於け
るその時の株式賣
買の状況。

りました。外國ではマイクローフォンを中心として、次第に高く段が設けられてあるさうですが、日本では平床ひらどこですから、音の種類や高低によつて、マイクローフォンからの距離がさまざまに變るので、なほ劇を演ずる場合には、芝居で行ふのと同じやうに、種々の擬音ぎおんの道具を備へて、波音、瀧音、風音、汽車、飛行機の音などを實際のやうに出すのです。

放送の仕事は、天氣豫報や、株式市況や、ニュースなどを放送する報道と、講演や教育的の事がらを放送する教養と、音樂、劇、落語などを放送する慰安との三つに分れてをります。そして時間はほぼ三分して、交互たがひに放送されてゐます。しかし、現今東京放送局では電波の長さを變へて、同時に二種類の放送を行つてゐます。更に違つた波長を用ひれば、同時に三種の放送も出来るわけです。かういふわけで、放送局では一年中休む暇もなく、苟も私たちの生活に必要なさまざまの事がらを、日本全國ばかりではなく、

全世界に向つても放送してゐるのです。海外に居住してゐる人が、日本内地に起つたいろ／＼な珍しい事實を、新聞よりも早く知る事の出来る喜は言ふに及ばず、目に見えぬ電波によつて、故國に接する嬉しさは、譬へやうもないと言つて來てゐるさうです。

お問合せの事がらを、十分に御説明申し上げる事が出来ませんで相済みませんが、大體これで御想像下さい。遙かに御健康を祈ります。さやうなら。

六 四季小品

一 春雨

中島廣足

萱ふける軒は雨の音しづかにて、池水のあやこまやかなるに、いと深く霞める梢より、翅しをれたる鳥どもの、そこはかとなく飛び

中島廣足
江戸時代末期の國
學者、櫻園と號し
た。熊本の人文
久四年(一五二四)
年(政)年七十三

暮れぬればまし
ていと しめや
かにて 見る 書
さへ 今ひときは
心 しみぬ

香川景樹
江戸時代末期の歌
人。桂園と號し
た。鳥取の人。京都
に住んだ。天保十
四年(二五〇三年)
歿。年七十六。

摩 あはせたる
ものにも 似ず

清水濱臣
江戸時代末期の國
學者。泊酒舎
と號した。江戸の
人。文政七年(二
四八四年)歿。年
四十九。
雁がねの きぬた
を さそふにやあ
らん

わたるなど、いといたうをかし。暮れぬれば、ましていとしめやかに
て、見る書さへ今ひときは心しみぬ。風少し吹出でて、燈火のまたゝ
きたるに、何とも知らぬ花の香の、ほのかにうちかをりをりたるなども
をかし。

二 風 鈴

香川 景樹

(樞園文集)

月の晴れわたり、花の散行くとき、を告ぐる、いとあはれなり。
かの入相、曉うち定めたるたぐひならんや。まして水無月の照る日
かげろひて、竹の若葉、松の葉末、そよめきいでし夕暮に聲あはせた
る、ものにも似ず。

三 きぬた

清水 濱臣

(かるかや集)

近しと聞けば遠く、遠しと聞けば近し。しきるもたゆみ、たゆむも
またしきる。雁がねのきぬたをさそふにやあらん。きぬたの音の雁
がねに通ふにやあらん。あなあやし、あなあやし。そもこの音の悲し

伴蒿蹊
江戸時代末期の國
學者。右は資芳。閑
田子と號した。近
江の人。文化三年
(二四六六年)歿。
年七十四。

染めぬべきもの
なくなりぬれば
みぞれ(雲)

昔はれしなんは
やがて老の はじ
めにて

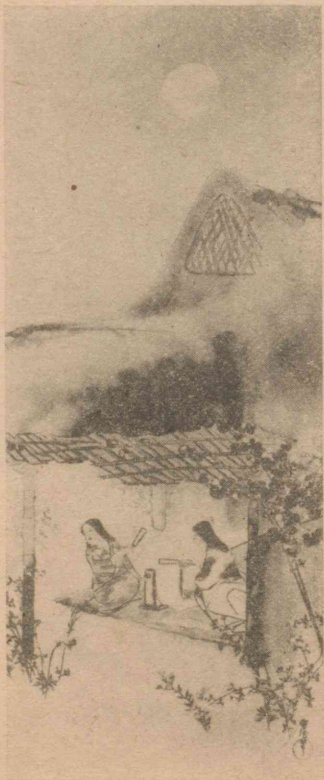
きか。住む里の寂しきか。打つをりの憂き故か。皆あらず。聞く人の心
の寂しきなり。

四 冬のこゝろ

伴 蒿 蹊

(泊酒舎文集)

花咲き實な
りし木も紅葉
を限りに冬が
くれ、木の芽春
雨も時雨に變
り、それも何時
しか染めぬべきものなくなりぬれば、みぞれに移りて雪と積る。一
歳の月日は隙行く駒の程もなきかな。振分髪のうちなる子がおとな
しくなりぬと言はれしなん、やがて老のはじめにて、終にひげ髪の
白くなりぬるをしもつくづくと思ひくらべて、埋火の許にのみう



きぬた(神坂雪佳筆)

若き人々はさ
こそ見苦し
思ふらめ
少壯いくばく時
ぞ云々
「少壯幾時ぞ老を
奈何」漢の武帝、
秋風辭
前の車の云々
「前車の覆るは後
車の戒」説苑

未飽花
らんかむによ
りてむかふも
けふ幾日あか
ぬころを花
もしらなむ
高蹊
老いては云々
「少くして大志を
有し、嘗て賓客に
謂つて曰く、窮し
の志たる、窮して
はまさに益と堅か
るべく、老いては
まさに益と壯なる
べし。」後漢書、
馬援傳

づくまるを、若き人々はさこそ見苦しと思ふらめ。我もまたしかぞ
ありし。少壯いくばく時ぞ、老をいかんと詩にも聞ゆるを、徒に朽果
てぬる事の、今更に悔ゆるもかひぞなき。前の車の覆るを後の車の
戒てふ事もあり。我にな倣ひ給ひそよ。

冬は歳の餘りとも言ふを、この頃の雪を集め、長き夜をむなし

未飽花

あはれんこころは
あはれんこころは
あはれんこころは
あはれんこころは

頃筆蹊萬伴

ないね給ひそと言はまほし。老いては益壯なるべしと勇みし人は、
己がたぐひにはあらず。たゞ寒きにたへねば、ひたやごもりに籠る
程に、ねぶりは宵よりきざして、しかも夜深くは目覺めぬ。冬も憂し。
老も憂し。こは老の心をうつすとや言はん、冬の心をうつすとや言
はん。

(關田文章)

當年は殊の外
よう 出來てござ
る
むじな(貉)

汝は今夜
せいで...番を
山田

七 狐 塚

主「このあたりの者でござる。それがし山田を數多持つてござる。
當年は殊の外よう出來てござる。さりながらこの頃は鹿猿、むじな
が出て田を荒します。太郎冠者を呼出し、山田の番にやらうと存ず
る。やい、太郎冠者あるか。太はあ、御前にをります。主、汝を呼出す
こと別の事でない。當年は身どもの山田が殊の外よう出來た。それ
に就き、この頃は鹿猿が田を荒す程に、汝は今夜山田へいて、鳥獸も
來たらば追うて番をせい。太、畏まつてござる。私一人でござるか。主
「いや、後程は次郎冠者も見まひにやらう程に、まづ行け。太、心得まし
ばかされぬやうにして番をせい。太、それはこはい事でござる。もは
や參ります。主、あす早々歸れ。太はあ、主、えい。太はあ、さても、迷惑

夜晝使はるゝといふは氣の毒な事ぢや

小筒もちと持つて行け

ほい〜太郎冠者やい〜どこに

ようこそおりやつたれ

な事をいひつけられた。夜晝使はるゝといふは氣の毒な事ぢや。參る程にこれぢや。まづこれにゐて番をいたさう。

主 太郎冠者を山田へ番に遣してござる。定めて寂しうしてゐるでござらう。次郎冠者を見まひに遣さうと存ずる。やい〜、次郎冠者あるか。次、これにをります。主、汝は大儀ながら山田へいて、太郎冠者が伽をしてやれ。次、畏まつてござる。主、小筒もちと持つて行け。次、心得ました。これはさて迷惑なれども、參らざるまゐ。主、命ぢや、是非に及ばぬ。これは暗うて、どこやら知れる事でない。呼ばはつて見よう。ほい〜。太郎冠者やい。どこにゐるぞ。太、さればこそ狐が出た。あれは次郎冠者が聲ぢや。よう似せた。おのればかざるゝ事ではないぞ。まづ眉毛をぬらさう。次、ほい〜。太、ほい〜、此所にゐるは、次、どこにゐるぞ。太、此所にゐるは、やあ次郎冠者か。次、なかく〜。頼うだ人にいひつけられて、伽に來たは、太、ようこそおりやつたれ。さて

大きな鹿が出た

どつこへやる事ではないぞ

おのれ今に皮を剥いでくれうぞ

また狐が出をつた

もさてもようばけた。そのまゝの次郎冠者〜。捕へて縛つてやらう。やい次郎冠者。最前向ふの山から大きな鹿が出たを、身どもが追うたれば、此方の山へくわらく〜と逃げたは、次、それはでかした。太、「どつこへ、やる事ではないぞ。次、これは何とするぞ。太、何とするとは狐め。ばかざるゝ事ではないぞ。次、おれは次郎冠者〜。太、何の次郎冠者。おのれ縛つて、この柱にくゝつて置いて。狐殿よい體なりのおのれ今に皮を剥いでくれうぞ。

主、太郎冠者、次郎冠者を山田へ遣してござる。心もとなうござる。見に參らうと存ずる。ほい〜、太郎冠者やい。次郎冠者やい。ほいほい。太、これはいかなこと。また狐が出をつた。あれは頼うだ人の聲ぢや。これも捕へてやらう。ほい〜。主、ほい〜、どこにゐるぞ。太、此所にゐます。主、やあ、これにゐるか。寂しからうと思つて見まひに來た。次郎冠者を先へおこしたが、太、なかく〜。あれにゐます。これはいか

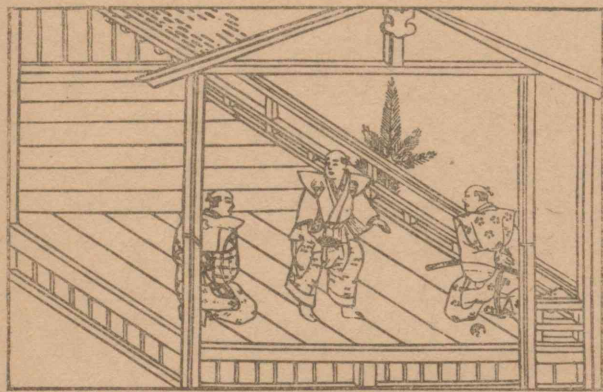
がつきめ、おのれ
でたまさるゝ事
ではないぞ

なこと。これもようばけた。そのまゝ頼うだ人ぢや。縛つてくれう。がつきめ。おのれだまさるゝ事ではないぞ。主、これは何とするぞ。身どもぢや。太、おのれもようばけた。まづ縛つて、この大木にくゝりつけて置いて、いたしやうがある。狐は松葉でふすべるといやがるといふ。ふすべてやらう。さあゝ、尾を出せ。鳴けゝ。主、おのれ太郎冠者め。主をこのやうにして。罰あたりめ。太、何を狐殿いはるゝ。さらば次郎冠者もふすべてやらう。さあゝ、鳴けゝ。こんゝといへ。次、これは何とするゝ。太、ありやゝゝ、いやがるはゝ。おのれ二匹ながら鎌を取つて来て、皮を剥いでくれうぞ。待つてをれ。ようばかさうと思つたなあ。只今殺してくれうぞ。鎌を取つて来るぞ。主、さてもさても氣の毒な奴ぢや。やあ、それに見ゆるは次郎冠者か。次、さやうでござる。こなたは頼うだ御方か。主、なかゝ。汝も縛りをつたか。次、いかに縛られました。主、何と鎌を取つて来る、殺さうといひをつた

汝も
縛りをつた
か

どうやら
とけさうに
ごさる

この
程に
寄るまい
そ



狐 (續狂言記所載)

が、何とそちが繩はほどかれぬか。次、されば、どうやら繩がとけさうにござる。とけますぞ。とけますぞ。さあとききました。どれゝ、こなたもときませう。さてもゝ、憎い奴でござる。何としたものでござらう。主、いやゝゝ、この體ではそばへ寄るまい程に、元のやうにしてゐて、これへ來たらば捕へて、あいつをゆりにあげう。次、一段とようござらう。主、さあ、これへ寄つて、元のやうにしてゐよ。次、心得ました。太、狐めは二匹ながらをるか知らぬ。この鎌で殺してくれう。さあ、今うち殺すぞ。うち殺すぞ。主、それや次郎冠者。次、心得ました。主、おのれ憎い奴

縛りをつたがよ
いかこれがよ
まつびら 御許さ

の次郎冠者、足を持って、次心得ました。圭、さあ、ゆりにあげく。太、これは何と狐どもするぞ。圭、狐とはまだおのれめは憎い奴の縛りをつたがよいか。これがよいか。太、さては頼うだ人、次郎冠者か。許させられ。まつびら御許され。まつびら御許され。二人、どこへ失せる。やるまいぞ。やるまいぞ。

(續狂言記)

八 道まなぶ人

松平 定信

一 道まなぶ人

かの人は雪ほたる集めし窓に年を積みて、ふみ見る道に心を盡し侍るなり。されば世の中の事には、いと疎く侍りと言へば、さるこそまことの道まねぶ人なりけれと、ほめものする者もありとや。もとより道まねぶ者は、五つのつね、五つのみちよりして人ををさめ、己ををさむる道まねぶよりほかの事はなし。されば世の事にさと

松平定信
白河城主。田安宗
武の老中となり、
退隠して樂翁と號
した。文章を好
み、和歌文章を善
くした。文政十二
年(二四八九年)
歿、年七十九。
いと疎く侍り。
さるこそまこと
の道まねぶ
人なりけれ

今のあたりのみ
かは：至るまで
も、明らかなるを
こそ、道まねぶ
人とは、言ふべ
けれ

く、今のあたりのみかは、千とせのさきつ世の事、見ぬもろこしのむかし今のさまより、さかりおとろふるきざし、人の心の上より、仕ふる道のくさく、に至るまでも明らかなるをこそ、道まねぶ人とは言ふべけれ。この世の事におろそかにては、いかで道まねぶ人とは言ふべからんと。

二 人を見るに心得べきこと

ある翁に、かの人はいかなる人にかと問へば、いとよき人なりと答ふ。彼はと言へば、よき人と答ふ。必ず彼をば悪しきと言はんを、選びて尋ねみるに、よき人と答ふ。いかなる事ぞと尋ねしに、人を見るには、まづ十にして五つばかりもよき事あるは、いとよき人と見るべし。十にして一つ二つもよき事あるはよき人なり。十にして皆悪しきをば悪しきと心得給へ。と言ひしとぞ。こは人をかく見るなり。われを見るの道ならず。善きも悪しきも、かろきとおもきとのわか

人を見るにはよ
まづ十にしてよ
き事あるはよ
いとよき人と
見るべし

ひこぼし、またはいをの骨たてしよなど言ふもあるべし。さればかくせんと思ふ志のひとつなりと言ひし。

六 鷹の羽にすむ蟲

鷹の羽にすむ蟲ありけり空高く飛びかける時は、遙かに人の住家などをも見くだしつげに我は事足れる身かな、翼も動かさず千里の遠きに行通ひ、雲居のよそまでもあがるめり。殊にさまゝの鳥は皆怖れてにげ走る、げにも我に勝つものは大方あらじなど思ひつゝ、かの鷹の毛のうちにあつゝ、頻りにしゝむらをさし、血を吸ひてゐしが、そのやからいと多くなりもてゆきしにや、つひにその鷹も斃れにけり。それより自ら出でて飛びかけらんと思へども飛び得ず、走らんと思へども速ならず。血もつきしゝむらもかれぬれば、今は命つなぐやうもなし。からうじてまづその毛のうちをくゞり出でてはひ行けば、雀の子のあたりけり。我を怖れなんと見れば、

空高く飛びか
ける時は見
くだしつ

つひにその鷹
も斃れにけり

我を怖れなんと
見れば雀のさ
まなり

雀の子は知らぬさまなり。いかにして見附けざるかと傍にはひよれば、うれしげに見て、くちばしさしいだして、ついばまんとす。例なき事なれば怖しくてにげ隠れぬと、かの友どちに語りにけり。

(花月草紙)

九 底 冷

正富 汪洋

みぞれ降る宵、

うつくしきおもちやのバケツ

眼の前にさしあげて、

底といふ部分を、母に

問ひし後、手を入れて、

この底の冷たさを

底冷といふかと、

正富 汪洋
詩人。名は由太郎。
明治十四年岡山縣
に生れた。

愛らしき色白豊子、
顔をふりく母にいふ。

フランスの書物讀む母、
その間に答へなやみて、
たとへばよたとへばと、
口ごもりてほゝゑめば、
かはゆき手膝にならべて、
教待つしほらしさ。
みぞれはなほも降りつく。

一〇 熊野落

大塔宮二品親王は、笠置の城の安否を聞き召されん爲に、暫く南

大塔宮
護良親王。延暦寺
の大塔にをられた
ので大塔宮とい
ふ。

般若寺

奈良市外にある。

律宗。

笠置落城
元弘元年（一九九
一年）九月二十八
日。

御心安かるべ
き所なかり
けれ

一乘院
奈良興福寺の北に
あつた同寺の末寺
の一。

いかにして
聞きたりけん

御出であるべき
万もなし

都の般若寺に忍んで御座ありけるが、笠置の城既に落ちて、主上囚
はれさせ給ひぬと聞えしかば、虎の尾を履むおそれ御身の上に迫
りて、天地廣しと雖も御身を隠さるべき所なく、日月明らかなりと
雖も長夜に迷へる心地して、晝は野原の草に隠れて、露に臥すうづ
らの床に御涙を争ひ、夜は孤村の辻に佇みて、人を尤むる里の犬に
御心を悩まされ、いづことも御心安かるべき所なかりければ、か
くてもしばしはと思し召されけるところに、一乘院の候人按察法
眼好專、いかにして聞きたりけん、五百餘騎を率して、未明に般若寺
へぞ寄せたりける。

をりふし宮につき奉りたる人一人もなかりければ、一防防ぎて
落ちさせ給ふべきやうもなかりける上、隙間もなく兵既に寺内に
うち入りたれば、紛れて御出であるべき方もなし。
「さらばよし自害せん」と思し召して、既におしはだ脱がせ給ひた

事かなはざらん
腹を切らん
期に臨んで
はいと易かる
べし

言はんずる一言
を待たせ給ひけ
る

これ體のものこ
そ怪しけれ

りけるが、事かなはざらん期に臨んで腹を切らん事はいと易かるべし。若しやと隠れて見ばや、と思し召しかへして、佛殿の方を御覽するに、人の讀みかけて置きたる大般若の唐櫃三つあり、二つの櫃は未だ蓋をあけず、一つの櫃は御經を半ばすぎ取出して、蓋をもせざりけり。

この蓋をあけたる櫃の中に、御身をちゝめて伏させ給ひ、その上に御經を引きかづきて、隱形の呪を御心の中へ唱へてぞおはしける。

若し搜し出されば、やがて突立てんと思し召して、氷の如くなる刀をぬいて御腹にさし當てて、兵、此所にこそ、と言はんずる一言を待たせ給ひける御心のうち、推量るもなほ淺かるべし。

さる程に兵佛殿に亂れ入つて、佛壇の下、天井の上までも残る所なく搜しけるが、餘りに索めかねて、これ體のものこそ怪しけれ。あ

委しく搜す事
んずらん

前に蓋の開き
たるを見ざりつ
るがおぼつか
な

支那唐代の高僧、
支那三藏
印度に入り大部の
經文を持歸り、ま
たそれを漢譯し
た。
感涙 御袖
を
濕せり

の大般若の櫃をあけて見よ。とて、蓋したる櫃二つを開いて御經を取出し、底を翻して見けれどもおはせず。蓋開きたる櫃は見るまでもなし。とて、兵皆寺中を出去りぬ。

宮は不思議の御命をつがせ給ひ、夢に道行く心地して、なほ櫃の中におはしけるが、若しまた兵の立歸り、委しく搜す事もやあらんずらんと御思案あつて、やがて前に兵の搜し見たりつる櫃に入りかはらせ給ひてぞおはしける。

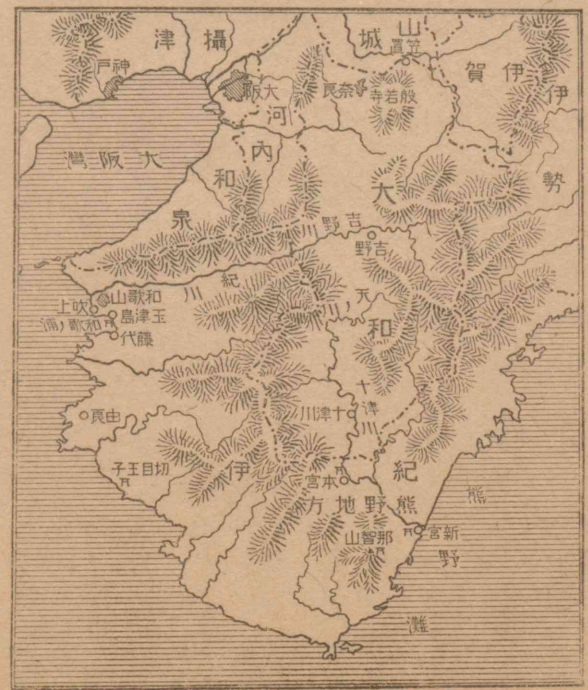
案の如く兵共また佛殿にたち歸り、前に蓋の開きたるを見ざりつるがおぼつかなし。とて、御經を皆うち移して見けるが、からくとうち笑うて、大般若の櫃の中をよくく、搜したれば、大塔の宮はいらせ給はで、大唐の玄奘三藏こそおはしけれ。とたはむれければ、兵皆一同に笑うて、門外へぞ出でにける。これ偏に摩利支天の冥應、または十六善神の擁護による命なりと信心肝に銘じ、感涙御袖を

熊野 和歌山縣牟婁郡を
ひろく熊野と言

赤松則祐 則村の第三子。延
曆寺の律師。初め
護良親王に従ひ、
後尊氏の叛に與し

村上彦四郎 義光、信濃の人。
元弘三年(一九九
三年)吉野城の陥
らうとした時、大
塔宮の身代りにな
つた。

濕せり。
かくては南都邊の御隱所かくれがもかなひがたければ、即ち般若寺を御
出でありて、熊野の方へ
ぞ落ちさせ給ひける。御
供の衆には光林坊玄尊、
赤松律師則祐、木寺相模、
岡本三河坊、武藏坊村上
彦四郎、片岡八郎、矢田彦
七、平賀三郎、彼此以上九
人なり。宮をはじめ奉り
て、御供の者までも、皆柿
の衣ほろに笈あしを掛け、頭巾かぶと眉
半まゆばにせめ、その中に年長としながざるを先達さきだちに作り立て、田舎山伏の熊野



定めて かなは
せ給は

由良の湊 和歌山縣日高郡に
もあるが、此所は
兵庫縣(淡路島)津
名郡由良町。和歌
山對岸の港。
藤代 和歌山縣海草郡。
和歌 和歌山市和歌ノ浦。
吹上、玉津島 共に同所附近。
切目の王子 日高郡切目村。

參詣する態にぞ見せたりける。

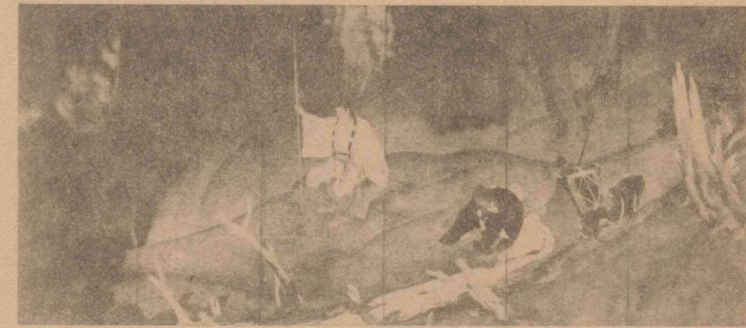
この君もとより龍樓鳳闕の内に人とならせ給ひて、華軒香車の
外を出でさせ給はぬ御事なれば、御歩行の長途は定めてかなはせ
給はじと、御供の人々かねては心苦しく思ひけるに、案に相違して、
何時習はせ給ひたる御事ならねども、怪しげなる單皮たがひ、脛巾ひざこぎ、草鞋を
召して、少しもくたびれたる御氣色もなく、社々の奉幣ほうへい、宿々のお勤
おこたらせ給はざりければ、路次に行逢ひける道者も、勤修ごんじゆを積め
る先達も、見咎みとがむる事なかりけり。

由良の湊を見わたせば、沖漕ぐ舟の楫緒絶え、浦の濱木綿はまわた幾重と
も、知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀の路の遠山渺々と、薄紫や藤代の、松に
懸れる磯の浪、和歌、吹上をよそに見て、月に磨ける玉津島、光も今は
さらでだに、長汀曲浦の旅の路、心を碎く習なるに、雨を含める孤村
の樹、夕べを送る遠寺の鐘、あはれをもよほす時しもあれ、切目の王

丹誠無二の御勤
感應などか
あらざらん

熊野三山
東牟婁郡。三山は
本宮、新宮、那智。

御わたり候うて

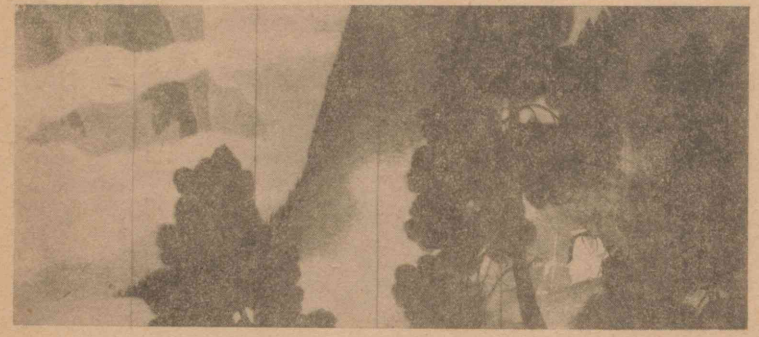


熊野落(筆秋長田磯)

子に著き給ふ。

その夜は叢祠の露に御袖を片敷きて、夜もすがら祈り申させ給ひけり。丹誠無二の御勤、感應などかあらざらんと、神慮も暗に測られたり。夜もすがらの禮拜に、御窮屈ありければ、御肱を曲げて枕として、暫く御まどろみありける御夢に、びんづら結ひたる童子一人來つて、熊野三山の間はなほも人の心不和にして、大義なりがたし。これより十津川の方へ御わたり候うて、時の到らんを御待ち候へかし。兩所權現より案内者に附けまゐらせられて候へば、御道指南仕るべく候。と申すと御覽ぜられて、御夢は即ち

見おろせば千丈
の碧潭藍に
染めり



熊野落(筆秋長田磯)

覺めにけり。これ權現の御告なりけりと、たのもしく思し召されければ、未明に御よろこびの奉幣をさゝげ、やがて十津川を尋ねてぞ分入らせ給ひける。

その路の程三十餘里が間には、絶えて人里もなかりければ、或は高峯の雲に枕をそばだてて、苔の筵に袖を敷き、或は岩もる水に渴を忍びて、朽ちたる橋に肝を消す。山路もとより雨なうして、空翠常に衣を濕す。見あぐれば萬仞の青壁劍に削り、見おろせば千丈の碧潭藍に染めり。數日の間かゝる險難を経させ給へば、御身もくたびれ果てて流るゝ汗水の如く、御足は缺損じて草鞋皆

饑乏つかれて

血に染れり。御供の人々もその身鐵石にあらざれば、皆饑乏つかれて、はか／＼しくも歩み得ざりけれども、御腰を推し、御手を挽いて、路の程十三日に、十津川にぞ著かせ給ひける。
(太平記)

一一 長柄堤の訣別

坪内 逍遙

坪内逍遙 英文學者、劇作家。文學博士。名は雄藏。岐阜縣の人。昭和十年歿、年七十七。
長柄堤 今の大阪市東淀川區を流れる新淀川の堤といふ。
片桐且元 豐臣氏の功臣。元和元年(二二七)五年(大阪)落城の時自殺した。年六十二。
茨木 今大阪府三島郡茨木町。
伊豆守 石川伊豆守貞政。
自殺せんとす覺悟

晨雞再び鳴いて残月薄く、征馬しきりにいなゝいて行人出づ。はや分れ行く横雲や、残んの星を一つづつ、鐘が消し行くいなめの、長柄堤に秋たけて、一叢蘆に風黒く、有明凄き大川水逝きて歸らぬ浪の音、狹霧に咽び白け行く、千草が蔭の蟲の聲、あはれはいとゞ優るらん。片桐市、正且元は、居城茨木へ立退かんと、從ふ郎等一百餘人、寅の刻に邸を立つて、大阪城を後になし、列を正して徐々と、長柄堤にさし掛る。その時市、正手綱を控へ、從兵を先へ進ませ、弟主膳正を呼び近づけ、改めて言ひけるやう、市「いかに弟、我昨日討手を待受け、自殺せんず覺悟なりしに、伊豆守が残兵ぬけがけなし、討手の荒膽をひしぎし爲、備ありと見たが

あまつさへ(刺)

命を きかばこそ

へしか、また寄せ來らん模様もなく、あまつさへ夜に入りては、外にありし家臣まで、變を聞きつけ馳集り、血氣のともがらこれに氣を得て、薪に油をそゞげる如く、弓、鐵砲とひしめき騒ぎ、命をきかばこそ。うち棄て置かば、珍事に及ばんも圖りがたく、暫く彼等をなだめん爲、ひとまづ茨木へ引退き、後事を圖らんとは言ひしものの、昨夜ほのかに傳へ聞けば、織田入道も君を見限り、俄に京表へ退きし由、お家の危機愈、迫んぬ。今にも關東と隙を生じ、大事に到らん事必定なり。それに就き所存あつて、先刻今村三右衛門を木村が邸へ走らせたり。おつつけ三右が吉左右あらん。我はこれにて相待つべし。御身は暫く我に代り、手勢を差配し、途中に不慮の間違なきやう、一足先へ參らるべし。

と言葉のうち、遙かにしたひ駈來る足音。

主あゝの足音は確かに今村。市「三右衛門か。今、我が君これに御座

織田入道 織田信雄常眞。君 豐臣秀頼。木村 木村長門守重成。

仰ではござりますれど。

ありしか。長門様にはおつつけこれへ。市ほ、大儀、々々。満足なるぞよ。然らば主膳は一足先へ。三右衛門も此所かまはず。我はこれにて相待つべし。主、仰ではござりますれど、油断ならざる當節がら、いかなる變事あらんも知れず、今、たゞ御一人この所に御座あらんは心もとなし、主、せめて我々、二人、兩人は。市はて入らぬ遠慮、氣づかひいたすな。往け。主、ぢやと申して、市はて往けと申すに。二人は、あ。

顔見合せて是非なくも、主膳を先に三右衛門、心残して行過ぐる。

後には何か一思案、寂然として駒たつる、長柄堤の有明方、ねぐらにさへづる小鳥の聲、川霧やうく晴行けば、遠樹模糊として幹を分ち、ほの見えわたる賤が屋に、一筋昇る朝煙、くだかけの聲、勇ましく、生氣溢るゝひんがしの、空には似ぬや入る方の、月凄じき柳蔭、枯葉枝まばらにして風飄々、見る目も昏し、遠方におぼろくとあらはるゝ、名におほ阪の四衢八街、悄然として寂しげに、一棟高く聳えしは、

故殿下
豊臣秀吉
加藤肥州
加藤肥後守清正。

せめぐ(関)
大政所
秀吉の妻。

千姫
徳川秀忠の長女。
慶長八年(二二六三年)秀頼に嫁いだ。
降つて沸いたる
京都方廣寺の大佛殿の鐘の銘に「國が家安康一の文字があつたので、家康は自分をお呪するものがあるとして、いひがかりを持ちかけた。

市お、あれこそはお天守ぢやなあ。南山不落と祝はせられ、千萬年の後までもと、築かせられし大阪城、故殿下かくれさせ給ひて後、まだ程もなきに礎ゆらぎ、諸大名の心は離れ。取分け加藤肥州逝去の後は、思慮ある者には堅節なく、義勇を存する者は才略乏しく、阿附黨同して相せめげば、大政所の御方さへ、當家を餘所に見そなはし、浮世離れし御有様。脣齒既に亡ぶ。今にもあれ事起らば、金城湯池もそのかひなく、

言ひかけて聲曇らせ、

市須彌より重き御遺命、夢聊かも忘れざれど、御運の末か情なや。この且元がする事なす事、いすかの嘴とくひ違ひ、兩家を繋ぐ絆にもと、迎へ奉りし千姫君は、東西不和の道火となり、毘廬遮那佛の御胸にも、大慈大悲は宿らざるか、お家とこしなへに康かれと、祝ひし文字が原となり、降つて沸いたる難題は、たゞ前門の虎にして、後に不

わな(良)

慮の豺狼あり。かゝる仕儀となつたる事、御運の末と言ひながら、
こらへず馬より飛びくだり、彼方に向ひ平伏なし、
市、これ、しかしながら不肖且元、愚昧にして先見なく、姑息因循して
大事を誤り、空しく關東のわなに罹り、仰せ附けられし御遺命に、背
き奉る今日の仕合。不忠とも言ひがひなしとも思し召さん。それを
思へば某が、この腸はちぎるゝばかり。つぐのひがたき不臣の罪は、
あの世でおわび仕らん。お宥しなされて下さりませ。
在すが如く兩手を突き、人目なければ稍しばし、不覺の涙に暮れけるが、
稍あつて心づき、

市、あゝ、我ながら不覺の至。我が大罪の御わびよりも、さしかゝる
お家の安危。長門守にはいかにせし、心もとなき事どもぢやなあ。
すかし眺むるをりこそあれ、遙かに聞ゆる蹄の音。程もあらせずたゞ一
騎、殘霧つんざき一散に、汗馬に宙を走り來る木村長門守重成。

長門守にはいかにせし。程もあらせず

市、正殿に候な。市、長門殿待ちかねしぞ。

言ふ間に駈寄るくつわづら、右手にあり立ち顔見合せ、言葉はなくてそ
ぞろにも、まづ袖ぬるゝ朝露や、風颺々たる枯柳の枝、入方の月ゆらめき
て、老行く秋の寂しさを、長柄堤に留むらん。

市、もはや豊臣の御社稷も、愈末となつたるか。棟梁と頼む足下ま
で、佞人、讒者の毒舌に、逆臣の汚名を受け、空しく退身せらるゝとは。
某圖らぬ事よりして、端なくも御母公の御嫌疑蒙り、出仕を遠慮の
その間に、思ひがけぬ珍變あり、續いて足下に御討手と、昨朝承り大
いに驚き、すぐにお表へ參入すれば、城内議論沸くが如く、織田入道
殿日頃に似氣なく、激論の末席を蹴立て、只今退座ありしとばかり、
後は亂脈無法の評定。御母公の威を笠に被る、大野、渡邊等が我意暴
慢、この上は是非に及ばず、彼等を一刀に斬つて捨て、腹かき切らん
と二たびまで、刀の柄に手は掛けしが、貴殿の日頃の教訓を、思ひ出

御母公
秀頼の母淀君。

大野
名は治長。
渡邊
名は礼。

せいしくも堪忍せられしぞや。かねても屢申せし如く、お家の大仇は彼等にあらざ。鼠輩の爲に命を落すは、大忠臣の所爲にあらじ。某とてもこのたびの一條、遺恨骨に徹すと雖も、今更繰返すは愚痴の至。大切なるはお家の後事。某退去の事關東に聞えなば、破綻生ぜん事治定なるに、昨日までは去就を定めざりし織田殿の、既に心を變じ、京表へ退身せられしからは、城内の祕密悉くもれ、年來の苦心皆うたかた、大亂破裂せんは目前なり。この上はたゞ偏に、籠城の計畫こそ肝要なれ。木してその智謀の將とは、市今九度山に隠れ忍ぶ、信州上

九度山 和歌山縣伊都郡高野山の北谷にある村。

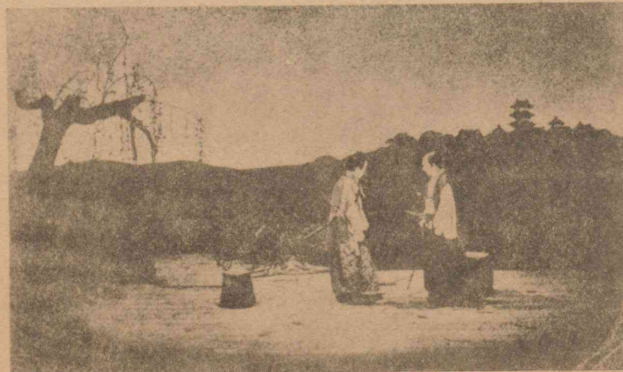
して無念を忍び、無實と知つて忠臣を、救ひ得ざりし言ひがひなさ。悔むを且元おし宥め、市、いしくも堪忍せられしぞや。かねても屢申せし如く、お家の大仇は彼等にあらざ。鼠輩の爲に命を落すは、大忠臣の所爲にあらじ。某とてもこのたびの一條、遺恨骨に徹すと雖も、今更繰返すは愚痴の至。大切なるはお家の後事。某退去の事關東に聞えなば、破綻生ぜん事治定なるに、昨日までは去就を定めざりし織田殿の、既に心を變じ、京表へ退身せられしからは、城内の祕密悉くもれ、年來の苦心皆うたかた、大亂破裂せんは目前なり。この上はたゞ偏に、籠城の計畫こそ肝要なれ。木してその智謀の將とは、市今九度山に隠れ忍ぶ、信州上

眞田安房守 名は昌幸

幸村 大阪落城の際戦死した。年四十六。

長曾我部盛親 關ヶ原の役、西軍に與して敗れ、京都に浪居した。後、大坂に於て戦つたが、元和元年(二七)に、東軍に捕へられて斬られた。年四十一。後藤又兵衛 黒田孝高の子。關ヶ原役後浪人した。元和元年戦死した。年四十六。

田前の城主、眞田安房守が二男、左衛門佐幸村こそ、故太閤の恩を思ふ。智勇兼備の良軍師。關ヶ原の一戦以來、關東の跋扈を怒り、蟄して世のさまを窺ひをるを、先年お身方となし置いたり。事起らば上使を以て、急ぎ彼を招かるべし、合戦の進退は、一切かの人に任せられよ。その他關ヶ原の一亂以後、浪々なせし長曾我部盛親、まつた黒田家の浪人後藤又兵衛基次、いづれも得易からぬ良將なるが、かねてちなみは附け置きたり。上御使を以て招かせられなば、心を傾け馳參せん。これ第一の手配なり。木してまた籠城となつたる曉、敵を防がん手配は、市その儀もかねて地利を考へ、出



別 訣 の 堤 柄 長

偏に 君家を 守
護する ときんば
奸老雄
徳川家康。

速水 名は守久。
御宿 名は正倫。
和久 名は宗是。

丸なくてはかなふまじと、前年紀州の山々より、材木數多伐出させ、商業の爲と偽り、紀州川の川上より、浪速津に、押流させ、御船入に積置いたり。まつた港口の御庫には、年頃方めて購ひ置きたる、數萬俵の糧米あり。籠城數年にわたると言ふとも、なほ支ふるに餘りあるべし。木、それに加へて故殿下が、貯へ置かれし數萬の金銀、近年御出費嵩むと雖も、なほ若干の餘財あり。市、甲冑、兵具も乏しからず。木、城は名に負ふ南山不落。市、眞田、後藤の智勇をもて、この堅城に立籠り、忠臣悉く心を一にし、偏に君家を守護するときんば、木、たとひ關東の奸老雄、利をくらはせ諸大名をなづけ、六十餘州の兵を盡し、四方八面より攻寄すとも、市、なか／＼三年四年が程には、攻落さん事かたかるべし。木、まつた若年には候へども、愈、軍始りなば、我また一方を承り、速水、御宿、和久等と共に、忠義を金鐵の堅きに比し、命はもとより鴻毛の、吹飜さん白旗は、祖先佐佐木が四つ目結

君臣將士 心を
一にし 千變萬化
の 手を 盡さば
金石も また
透りぬべし。

大御所
家康。

君臣、將士心を一にし、千變萬化の手を盡さば、金石もまた透りぬべし。利欲に集る關東勢、なに退くるにかたかるべきや。この上は仰に従ひ、この事君に言上なし、直ちに軍の手配せん。御心安かれ市、正殿市、ほ、たのもし、く。たゞ大切なるは上下の一致、必ず忠勤勵まれよ。とは言ひながら往時に照し、成行く末を鑑みれば、木、淀の方の御氣質、社鼠に等しき大野、渡邊。市、上、御發明にわたらせらるれど、木、讒佞これを蔽ふが故、市、地の利はあれども人の和なく、木、故太閤が御威武に、おのゝき震ひうち伏しし、六十餘州の民草も、市、天の時にや大御所のおのづからなる徳風に、何時しか靡く世の有様、木、いかなればかくまでに、御運傾く西天の、市、有明の影薄れつゝ、木、東天紅と八面に、かしましく鳴くくだけかけは、市、新日東天に昇るといふ、木、世の成行の、市、二人影なるか。
是非もなき世の有様と、入る方の月詠め入り、しばしは愚痴にをちかた

寺、耳驚かす鐘の聲、夜はほのくくと明けにけり。

(桐一葉)

自慊文

國劇展開の跡

河竹 繁俊

河竹繁俊
演劇博物館長。
早稲田大學講師。
昭和二十二年長野縣
に生れた。本文は
特に本書の爲に執筆
したものである。
統和
統一調和。

演劇は綜合藝術と呼ばれますが、これは文學、美術、音樂等の諸藝術が綜合統和されて、獨特の一藝術形態をなしてゐるからであります。例へば、演劇の基礎となる戯曲は文學であり、背景、衣裳、調度等は美術或は工藝に屬し、またその演出に際しては、多くの場合音樂が伴奏されます。これ等の藝術は一つくでもその國の文化を反映し、また教養に役立つとされてをりますから、それ等の綜合になる演劇が、その國その時代の文化を極めてよく反映し、また教養の機關として大きな價值のある事は申すまでもありません。

從來、演劇は單なる娛樂機關視されがちでありましたが、その

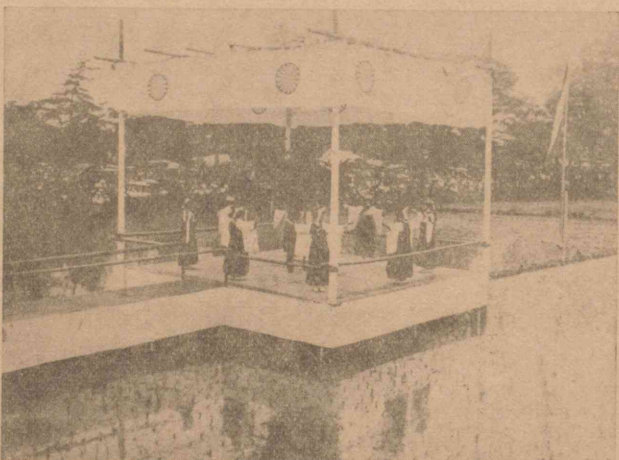
本質の研究や歴史的研究の發達に伴なひ、一般文化と密接な關係をもつ特殊な藝術と認められるやうになりました。就いては、我が國の演劇はいかなる展開を遂げて今日に及んだか、また各時代の文化といかなる交渉をもつてゐたか等に關して、簡単に述べて見ようと思ひます。

有史以前の我が國土に、いかなる演劇、若しくは演劇類似のものがあつたかは判然しません。今日もアフリカの奥地や南洋諸島等に住む未開民族の間に行はれるものによつて、大凡は推測し得られます。彼等の生活に最も重要な事は生命を保つ食物の獲得であります。そして狩獵、漁撈、農耕等に際しては、なるべく豐獵であり、豐作であるやうに祈念する結果、そこに或模倣の動作が試みられるのであります。例へば、假に我が國のやうに米作を基本とする場合とすれば、稻の播種に先立つて豐作を冀ふ祭が行はれる。種子を蒔く狀、天候の順調を期待する狀、稻の穂もた

生活擁護の云々
生活をまもる爲の
なくてはならぬ事。

わゝに實のつた状、刈入の状、豊作を喜悅するの状等を逐次模倣動作によつて現し、神様に御覽に入れて、何卒さうあらしめて下さるやうにと祈ります。さうすれば、神様はそれと類似の結果、即ち豊作を與へて下さると信じたのであります。狩獵や漁撈に於ても同様であります。また祖先の靈を畏敬して、その徳を稱へ、その加護を祈る心持を模倣動作によつて表現し、祭の主なる儀式とする事もあります。

これ等の模倣動作は、人間の本能に由來し、生活擁護の必須事として行はれるのであります。それと同時に或事がらや動作を模倣する事は、取りもなほさず演劇の發生だと言へるのです。と言ふのは、演劇は動作や言語の模倣によつて、或物語や人物や思想、感情等を表現しようとするものだからです。世界各國を通じて、演劇の發生が多くの場合宗教的祭祀儀式に基づくと云はれるのは、かうした理由からであります。現に我が國諸地方に行



はれる社寺中心の田植祭、風の神祭などと稱せられる神事舞、或

は郷土舞踊の大部分は、いづれも宗教的儀式として遺存されてゐるのであります。私共はかうしたものを汎く原始演劇と呼んでを植ります。原始演劇は殆ど何時の代にも存し、後世の演劇を形成するに役立つてゐるのであります。

飛鳥朝に於ける聖德太子の進取的政策、佛教の傳來によつて、我が文化は急に向上し始めました。演劇の方面に於ては飛鳥、奈良の兩朝に互る約三百年間に朝鮮、支

那、印度、滿洲等大陸諸國から伎樂、舞樂、散樂等各種の樂舞が輸入

嵯峨天皇
第五十二代。
仁明天皇
第五十四代。

朝典樂
朝廷の儀式に用ひ
られる音楽、舞踊。
式樂
すべて儀式に用ひ
られる音楽、舞踊。

されました。
このうち舞樂はしやう、ひちりき、笛、太鼓、琴等の器樂に伴なふ舞踊本位の演劇ですが、奈良、平安の兩朝を通じて最も盛んに行はれました。平安朝初期に嵯峨、仁明の兩天皇が深くこれを嗜ませられ、また樂舞の天才も多く輩出し、音樂並びに舞態の上に大改變が行はれ、全く日本化したものとなり、一千年後の今日にまで保存されてゐるのです。而してこの舞樂は、當時の文化を構成してゐた宮廷、公卿、僧家等によつて支持され、賞玩されて朝典樂、或は寺社の式樂として行はれ、實に平安朝時代を代表する演劇だつたのであります。
平安朝の末、藤原氏が衰へ、武家の擡頭を見、文化の擔任者はここに一變しました。しかし、武家は教養の度に於て公卿に劣つてゐましたので、舞樂よりも卑近で親しみ易い演劇を要求し、こゝに能樂の完成を見たのであります。

樂舞
音樂舞踊の類の總稱。歌舞といふのと同じ。
寸劇
短い、輕快な味のあ
る劇。
延年舞
中古から近世にか
けて僧家の間に行
はれた歌舞。

足利義滿
室町幕府第一代の
將軍。應永十五年
(一四三八年)歿。
觀阿彌
本名は結崎三郎清
次。元中元年(一
三二〇年)歿。二
五十二年。
世阿彌
名は元清。嘉吉三

能樂の起原は原始演劇の一種たる散樂に發してゐます。散樂は平安時代には猿樂と呼ばれ、滑稽諧謔を主とする各種の卑俗な樂舞、寸劇の總稱でした。この猿樂の藝人が舞樂の流を汲む延年の舞を演ずるうち、能藝と稱するものを生むやうになりました。
能藝は能とも略稱され、或纏つた物語を言語動作によつて表現するかなり演劇的價値あるものであります。一方同じく平安中期から田園の間に成長し、やがて都人士にも歡迎された原始演劇に田樂といふものがあり、この田樂が鎌倉時代に入つて武家の愛護を受けて大いに發達し、田樂能を展開せしめました。能には田樂系と猿樂系との別はありましたが、結局同一形態のものと思はれてをります。
それが足利義滿の世になつて、室町幕府の式樂として猿樂能が採用されましたので、急に興隆し、觀世流の祖觀阿彌、世阿彌父

年(二一〇三年) 説あり)

子の非常な努力によつて、こゝに能樂の集大成を見たのであります。その後江戸時代に入つて能樂は一層の精練が施され、今日に及んでゐるのであります。我々が國に於ける脚本を持つた完全な演劇の形は、この能樂に始まると言つてよいでせう。

鎌倉室町に次ぐ江戸時代も、武家が中心ではあり

ましたが、實は庶民の力が増大して、文化の構成者は武家よりは寧ろ庶民階級にありました。この庶民の要求に應じて生れたのが人形淨瑠璃、歌舞伎の二大演劇でありました。



人形劇

淨瑠璃 一宗長日記による
と享祿(二一八八
一)に既に相當流行
してゐた。

近松門左衛門 本名は杉森信盛
長門の人。享保九
年(二三八四年)
歿、年七十二。

竹本義太夫 義太夫節語り
の始祖。大阪の人。
正徳四年(二三四
四年)歿、年六十四。

吉田文三郎 大阪の人。寶曆十
年(二四二〇年)
歿、歿年不詳。

阿國 京都の女優。女優
の祖。元出雲大社
の巫女。正保(二
三〇四)一三三〇
年)の初年歿。
慶長頃
二二五六一二二七
四年。

人形偶人を操つて何等かの物語を表現する人形劇は、散樂の一部として早く大陸から傳來したと言はれますが、その人形遣と室町中期から勃興した淨瑠璃との結合したものが人形淨瑠璃劇で、操り劇とも呼ばれてゐます。

これは元祿時代に近松門左衛門と、竹本義太夫とによつて戲曲的にも、音樂的にも集大成が行はれ、更に享保に入り、人形遣の天才吉田文三郎によつて劇的大展開を遂げました。

さうして終に今日の文樂座に見るやうな一個の人形を三人で遣ふ精巧で大規模な人形劇にまで發達し、世界無類と言はれてゐるのですが、惜しい事に現在では衰退の一路をたどつてゐます。

歌舞伎劇は出雲の阿國の念佛踊に端を發してゐます。念佛踊と言つても郷土舞踊の一種で、佛臭いものではありませんでした。それが慶長頃京都でもはやされたので急に發達し、踊の外

かぶき
傾きで、圖にはづ
れたもの、異装の
ものといふ意。歌
舞伎(もとは妓)は
その當字。

承應元年
第百十代後光明天
皇の御代。二三一
二年。

坂田藤十郎
寶永六年(二三六
九年)歿、年六十
四。

元祖市川團十郎
寶永元年(二三六
四年)歿、年四十
五。

明和、安永、天明
二四二四—二四四
八年。

元祖嵐雛助
寬政八年(二四五
六年)歿、年五十
六。

三世澤村宗十郎
寬政十三年(二四
六年)歿、年四
十九。

に滑稽を主とした寸劇も演ぜられました。その劇に於ては女優は男装し、男優は女装するといふやうな事もあつて、異装の風俗や極端な舉動を敢へてして人氣を博したので、かぶき踊、かぶき芝居狂言と言はれるやうになりました。阿國の歌舞伎劇が著名になつてから、幾多の劇團が出来ましたが、その後五六十年を経た承應元年以後、歌舞伎俳優は成人の男優本位と法定され、こゝに今日に至るまでの歌舞伎劇の基礎が定められたのであります。

かくして歌舞伎劇は江戸時代一般民衆の熱烈な支持の下に發展し、元祿期に入ると京阪には坂田藤十郎、江戸には元祖市川團十郎等の名優、作者には近松門左衛門を得て第一次の大展開を見ました。次いで明和、安永、天明期に入ると、その直前に大發展をした人形浄瑠璃劇の戯曲や演出の様式を巧みに攝取併合して、複雑な演劇形態を生むに至り、燦爛たる全盛時代を現出しま

元祖尾上菊五郎
天明三年(二四四
三年)歿、年六十
七。

四世松本幸四郎
享和二年(二四六
六年)歿、年六十
六。

四世市川團十郎
安永七年(二四三
八年)歿、年七十
三。

五世市川團十郎
文化三年(二四六
六年)歿、年六十
六。

並木正三
通稱高砂屋半右衛
門。大阪の人。安
永二年(二四三三
年)歿、年四十四。

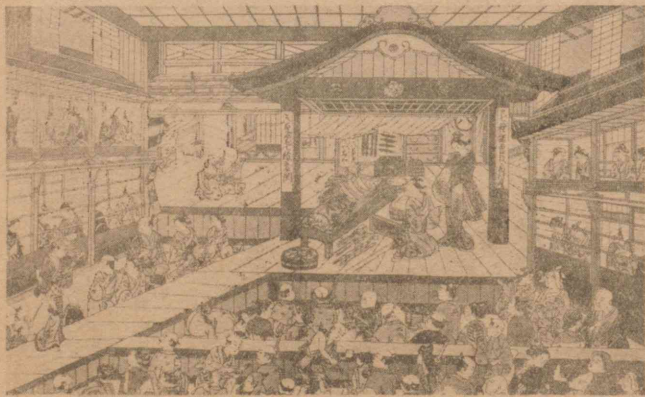
元祖櫻田治助
通稱笠屋善兵衛。
江戸の人。文化三
年歿、年七十三。

四世鶴屋南北
世に大南北といは
れる。通稱紺屋伊
之助。文政十二年
(二四八九年)歿、
年七十五。

河竹默阿彌
通稱吉村芳三郎。
江戸の人。明治二
十六年(二五五三

した。俳優では元祖嵐雛助、三世澤村宗十郎、元祖尾上菊五郎、四世松本幸四郎、四世、五世市川團十郎等、作者では並木正三、元祖櫻田治助等がこの期の功勞者でした。

その後は劇の中心地が京阪から江戸に移つて、文化、文政期には四世鶴屋南北、嘉永、安政期には河竹默阿彌等の作者が現れ、時代々々の名優の爲に健筆を揮ひ、三百年に近い傳統を保持して歌舞伎劇は愈々爛熟の境地に達しました。この歌舞伎劇こそは、先行の劇的藝術の各要素、音楽、舞踊等に至るまでも殆ど悉く取入れたもので、最も代表的な、また最も複雑な演劇であります。



歌舞伎 (市村座) (奥村信筆)

年、歿年七十八。

明治維新に於て社會組織に大變革が行はれ、自然演劇界にもさまざまの影響が與へられました。平安期に榮え、次第に衰へてゐた舞樂は朝典樂として復興整頓されました。また室町、江戸と榮えた能樂は保護者たる諸大名を失つて、一時は衰滅に瀕しましたが、貴紳の庇護獎勵を得て、一種の貴族的な古典藝術として存續の途が講ぜられるやうになりました。

ところが、庶民によつてのみ支持されて來た歌舞伎劇は、卒かにそのまゝ上下の階級に解放されましたので、その社會的地位は高められ、その設備、内容に就いての改良が叫ばれた結果、建築設備も向上し、劇そのものも次第に典雅となりました。一方時代の要求に應じて、明治中期には新派劇、末期以後に劇文學者の主宰せる各種の新劇團體、或は歐米から輸入された歌劇等諸種の新興演劇が発生しました。しかしそれ等は、未だ劇壇の主流を形

成するに至らず、大きな過渡時代にあると言つてよいのであります。

しかしながら伎樂、舞樂以來約一千三百年にも互る一系の演劇を持ち、同時に豊富なる遺存資料を持つ點に於て、實に世界に類例のない事を特記して置きたいと思ひます。

一二 方丈記

鴨 長 明

一 うたかた

ゆく川の流は絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、且消え且結びて、久しくとゞまる事なし。世の中にあらんと住家と、またかくの如し。

たましきの都のうちに棟を並べいらかを争へる、たかきいやしき人のすまひは、代々を経てつきせぬものなれど、これをまことか

鴨長明
鎌倉時代初期の歌
人、文學者。京都
の人。建保四年（一
八七六年）六十四
歳で歿したと言は
れる。

いらかを争へる
は人のすまひ
ものなれど

所も多かれど、人
も三十人がうち
二三人がわづかに
一人なり

あるは露落ち
て花残れり朝
残ると雖も朝
日に枯れぬ

安元三年
第八十代高倉天皇
の御代(一八三七
年)

と尋ねれば、昔ありし家は稀なり。あるは去年破れて今年は作り、あ
るは大家亡びて小家となる。住む人もこれに同じ。所も變らず人も
多かれど、古へ見し人は、二三十人がうちわづかに一人二人なり。
あしたに死しゆふべに生るゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。
知らず、生れ死ぬる人、いづ方より來りていづ方へか去る。また知
らず、假のやどり誰が爲に心を惱まし、何によりてか目を喜ばしむ
る。そのあるじと住家と無常を争ひ去るさま、言はゞ朝顔の露に異
ならず。あるは露落ちて花残れり。残ると雖も朝日に枯れぬ。あるは
花は凋みて露なほ消えず。消えずと雖もゆふべを待つ事なし。
凡そものの心を知れりしよりこの方、四十餘りの春秋を送れる
間に、世の不思議を見る事、稍たびくになりぬ。

二 安元の大い

去にし安元三年四月二十八日かとよ、風烈しく吹きて、靜かなら

火出で来て…
至る
塵灰となり

遠き家は煙に
たりは、近きあ
けたりは吹きつ

焰にまぐれ
て、忽ちに死に
ぬ。

ざりし夜、戌の時ばかり都の巽より火出で来て、乾に至る。果には朱
雀門、大極殿、大學寮、民部の省まで移りて、一夜が程に塵灰となり
き。火元は樋口富の小路とかや、病人を宿せる假屋より出で來ける
となん。吹迷ふ風にとかく移り行く程に、扇を廣げたるが如く末廣
になりぬ。遠き家は煙に咽び、近きあたりはひたすら焰を地に吹き
つけたり。空には灰を吹立てたれば、火の光に映じてあまねく紅な
る中に、風に堪へず吹切られたる焰、飛ぶが如くにして、一二町を越
えつゝ移り行く。その中の人、現心あらんや。あるは煙に咽びて倒れ
伏し、あるは焰にまぐれて忽ちに死にぬ。あるはまたわづかに身一
つからくして遁れたれども、資財を取出づるに及ばず、七珍萬寶さ
ながら灰燼となりき。そのつひえいくそばくぞ。このたび公卿の
家十六焼けたり。ましてその外は數を知らず。すべて都のうち三分
が一に及べりとぞ。男女死ぬる者數千人、馬牛のたぐひ邊際を知ら

養和
第八十一代安徳天皇の御代（一八四一年）

：營のみあり
なすぞめきはなし

田舎をこそ頼めるにこそ
さのみやつく
みさをへん

ず。人の營皆おろかなるうちに、さしも危き京中の家を作るとて、實を費し心を悩ます事は、すぐれてあぢきなくぞ侍るべき。

三 養和の飢饉

また養和の頃かるとよ、久しくなりてたしかに覺えず、二年が間飢渴して、あさましき事侍りき。あるは春夏日でり、あるは秋冬大風大水など、よからぬ事どもうちつゞきて、五穀悉く實のらず、空しく春耕し夏植うる營のみありて、秋刈り冬收むるぞめきはなし。

これによりて國々の民、あるは地を捨てて境を出で、あるは家を忘れて山に住む。さまざまの御祈始りて、なべてならぬ法ども行はるれども、更にそのしるしなし。京のならひ、何わざにつけても、源は田舎をこそ頼めるに、絶えてのぼる者なければ、さのみやはみさをもつくりあへん、念じわびつゞ、さまざまの寶物かたはしより捨つるが如くすれども、更に目見たつる人もなし。たま〜かふる者は

金を軽くし、粟を重くす。乞食路のべに多く、憂へ悲しむ聲耳に満てり。

さきの年かくの如く、からくして暮れぬ。あくる年は立直るべきかと思ふに、あまさへ疫病うちそひて、まさるやうに跡形なし。

四 わづらひ

すべて世のありにくき事、我が身と住家とのほかなくあだなるさまかくの如し。況や所により身の程に隨ひて心を悩ます事、擧げて數ふべからず。

若しおのづから身數ならずして權門の傍にをる者は、深く悦ぶ事はあるども、大いに楽しぶに能はず。歎ある時も聲を揚げて泣く事なし。進退安からず、立居につけて恐れおのゝく。例へば、雀の鷹の巢に近づけるが如し。若し貧しくして富める家の隣にをる者は、朝夕すばき姿を恥ぢて、諛ひつゞ、出で入る。妻子僮僕の羨めるさまを

世のありにくき事、あだなるさまかくの如し

深く悦ぶ事はあるども、楽しぶに能はず

見るにも心念なく
動きて安からずとし

寶あればおそ
ければ貧しき切
なり

忍ぶ方々云々
軒の草むしり
かな金葉集
防内侍
わづかに築地を
つげりと雖も
門たつるに
たづきなし

見るにも、富める家の人のないがしろなるけしきを聞くにも、心念に動きて、時として安からず。若しせば、地にをれば、近く炎上する時、その害を遁るゝ事なし。若し邊地にあれば、往反わづらひ多く、盜賊の難はなれがたし。勢ある者は貪慾深く、ひとり身なる者は人に輕しめらる。寶あればおそ多く、貧しければなげき切なり。人を頼めば、身他の奴となり、人をはごくめば、心恩愛につかはる。世に従へば、身苦し。また従はねば、狂へるに似たり。いづれの所を占め、いかなる業をしてか、しばしもこの身を宿し、たまゆらも心を慰むべき。我が身父方の祖母の家を傳へて、久しくかの所に住む。その後縁かけ身衰へて、忍ぶ方々しげかりしかば、終に跡とむる事を得ずして、三十餘りにして、更に我が心と一つの庵を結ぶ。これをありしすまひにならずらふるに、十分が一なり。たゞ居屋ばかりを構へて、はかばかしくは屋を造るに及ばず。わづかに築地をつげりと雖も、門た

五十の春
第八十四代順徳天皇
の承久(一八七九-一八八一年)の頃

大原山
一名小鹽山。今京都府乙訓郡にある。京都市の西南

旅人の一夜の宿
云々
「また行人の旅宿を造り、老蠶の獨り繭を成すが如し。その住む幾時ぞ。」(慶滋保胤、池亭記)

つるにたづきなし。竹を柱として車宿りとせり。雪降り風吹くごとに危からずしもあらず。所は河原近ければ、水の難深く、白波のおそれも騒がし。

すべてあらぬ世を念じ過しつゝ、心を悩ませる事は、三十餘年なり。その間をりゝのたがひめに、おのづから短き運をさとりぬ。即ち五十の春を迎へて家を出で、世に背けり。もとより妻子なければ、捨てがたきよすがもなし。身に官祿あらず、何につけてか執をとめん。空しく大原山の雲にいくそばくの春秋をか經ぬる。

五 閑 居

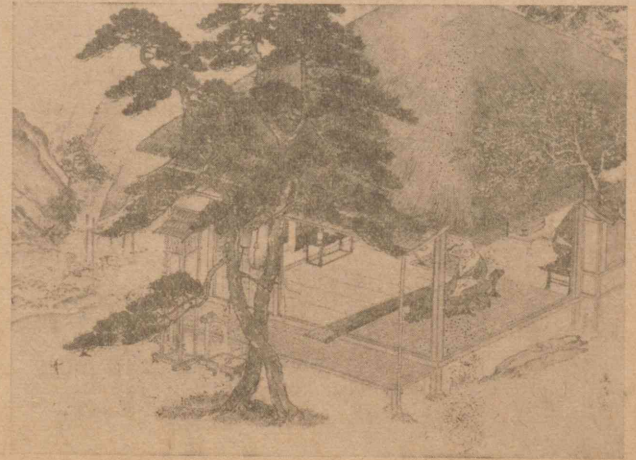
こゝに六十の露消え方に及びて、更に末葉の宿りを結べる事あり。言はゞ旅人の一夜の宿りを造り、老いたる蠶の繭を營むが如し。これを中頃の住家にならずらふれば、また百分が一にだも及ばず。とかくいふ程に、齡は年々に傾き、住家はをりゝにせばし。その家の

若し心に適はぬ事あらば、移さんが爲なり

日野山
京都市伏見區醍醐
木幡山の東北

有様世の常にも似ず。廣さはわづかに方丈、高さは七尺が内なり。所を思ひ定めざるが故に、地を占めて造らず。土居を組み、打覆を葺きて、繼目ごとにかねをかけたなり。若し心に適はぬ事あらば、易く外に移さんが爲なり。その改め造る時いくばくのわづらひかある。積むところわづかに二輛なり。車の力を報ゆる外は、更に他の用途いらす。

今日野山の奥に跡を隠して後、南に假の日がくしをさし出して、竹の簀子を敷き、その西に闕伽棚を造り、内には西の垣に沿へて阿彌陀の畫像を安置しまつり、落日を受け



(筆麻幾井永) 明 長 鴨

往生要集

六卷。源信僧都の著。源信は俗姓ト部。大和の人。寛仁元年(一六七七年)寂。年七十六。

東の垣に窓をあけて此所に文机を出せり

正木のかづらを埋めり跡

て眉間の光とす。かの帳の扉に普賢並びに不動の像を掛けたり。北の障子の上に小さき棚を構へて、黒き皮籠三四合を置く。即ち和歌管絃、往生要集如きの抄物を入れたり。傍に箏、琵琶各一張を立つ。いはゆる折箏、繼琵琶これなり。東に沿へてわらびのほども敷き、つかなみを敷きて夜の床とす。東の垣に窓をあけて、此所に文机を出せり。枕の方に炭櫃あり、これを柴折りくぶるよすがとす。庵の北に小地を占め、あばらなる姫垣を圍ひて園とす。即ちもろくの薬草を植ゑたり。假の庵の有様かくの如し。

その所のさまを言はゞ、南にかけひあり、岩を疊みて水を溜めたり。林軒近ければ、つま木を拾ふに乏しからず。名を外山と言ふ。正木のかづら跡を埋めり。谷しげけれど西は晴れたり、觀念の便りなきにしもあらず。春は藤浪を見る、紫雲の如くにして、西の方に匂ふ。夏は杜鵑を聞く、語らふごとに死出の山路を契る。秋はひぐらしの聲

罪障に喩へつべし。

岡の屋
京都府紀伊郡。宇治川の東岸。

沙彌彌
沙彌彌誓。第四十三代元正天皇（一三七五—一三三三）の御代頃の人。

潯陽の江を云々
潯陽江頭夜客を送る楓葉秋花秋瑟たり。（白樂天、琵琶行）

源都督
桂大納言源經信。琵琶の名手。嘉保元年（一七五四年）太宰権帥に貶せられた。

秋風、流泉
共に琵琶の名曲。

藤岡作太郎
國文學者。文學博士。金澤市の人。明治四十三年（一九一〇年）歿。年四十一。

京都附近の景は、エキスにたるもの

高雄
高尾、鷹雄とも書く。

紅燃ゆる紅葉を織りこみたるあり

耳に満てり、空蟬の世を悲しむかと聞ゆ。冬は雪を憐む、積り消ゆるさま罪障に喩へつべし。若し念佛物憂く、讀經まめならざる時は、自ら休み、自ら怠るに妨ぐる人もなく、また恥づべき友もなし。ことさら無言をせざれども、ひとりをれば口業を修めつべし。必ず禁戒を守るとしもなければ、境界なければ何につけてか破らん。若し跡の白波に身を寄するあしたには、岡の屋に行交ふ船を眺めて、沙彌彌が風情をぬすみ、若し桂の風葉を鳴らすゆふべには、潯陽の江を想ひ遣りて、源都督のながれをならふ。若し餘りの興あれば、しばしば松の響に秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。藝はこれ拙けれども、人の耳を喜ばしめんとにもあらず。ひとり調べ、ひとり詠じて、自ら心を養ふばかりなり。

一三 平安京

藤岡作太郎

日本は世界の樂土なり、東亞のイタリイなり。山川の風景往く所として佳ならざるなきが中に、殊に衆美を聚めたるを京都とす。京都附近の景は日本のすべての景をエキスにしたるもの。規模の雄大豪壯なるものは存せずと雖も、秀麗幽婉の形態は備へざるなし。東に近く比叡、如意ヶ嶽より三の峯まで、東山三十六峯笑ふが如く、北には鞍馬、貴船、氷室、鷹ヶ峯、高雄の山々波濤の如く、西に稍隔りて愛宕、小倉、龜山、嵐山、松尾より山崎に至りて地勢は窮る。松柏の綠色濃き中に、或は目覺むるやうなる櫻の入交るあり、或は紅燃ゆる紅葉を織りこみたるあり。一面の草の頂なる四明ヶ嶽、春なほ雪白き比良の遠山などは、わけて朝日夕日に照映ゆる色の千變萬化なるぞ面白き。東の神樂ヶ岡、北の船岡、西の雙ヶ岡は、大和の畝傍、香具山、耳成の如く近く相並びてあらねど、子の日の遊に小松ひく楽しみなど、いづれ劣らぬ所がら、南に稍隔りて男山これに對し、國家鎮護の八幡宮、宮

桂川
大堰川の下流。桂の渡から下をいふ。
二川南に合し嵐山の下を過ぎて桂川は賀茂川に合する。

波濤の壯觀なく...もの少し
長所なくんばあらず

柱太知りまして、仰ぐも畏し。
京の東端には賀茂川の流、糺の河合に高野の支流を集めて、南に珠を碎き去り、西に桂川、大堰の激湍に清瀧を併せて、琴の音涼しくまた南に向ふ。二川南に合し、更に淀の急流に流れこみて、沈々として西の方難波をさして走る。

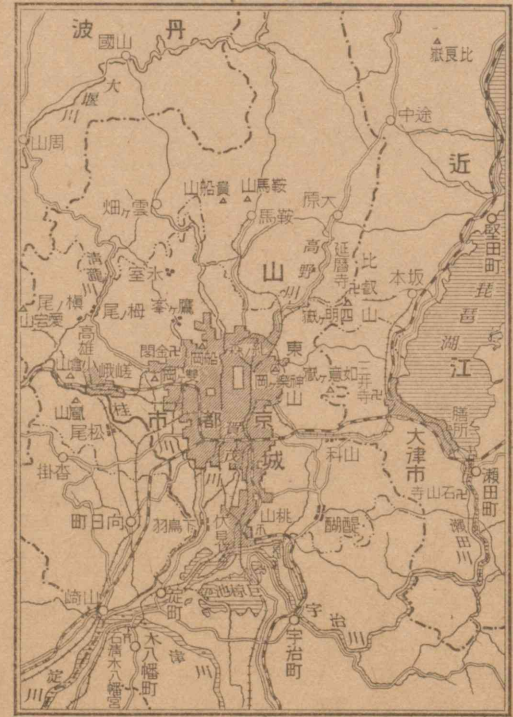
茫洋たる大海、浩蕩たる波濤の壯觀なく、跌宕の觀念を人心に與ふるもの少しと雖も、一面より言へば、山の内に籠りて海を見ざるは、またそれだけの長所なくんばあらず。地勢の勾配稍急なれば、蘆間に出で入る白帆の、町の側を往來する眺なき代りに、濁りて底の明らかならざる河水を知らず。京の水はわけてアルカリ性の鑛物を含めるにや、曝す布をも、人の膚をも眞白にす。海そのものは清けれど、棄てたる塵埃を更に岸に打上ぐるに、藻の臭も添ひ、漁夫などをる所は、わけて見るにも嗅ぐにも心地よからぬ事多し。京都に海

海なくして清き京都は益々

いかに變化に富めるかは説明を須ひずとも明らかなるべし

なきは惜しむべしと雖も、海なくして清き京都は益々清きなり。

山紫水明の語はよく京都の景色を言表せり。いづこの山水も、日中よりは朝夕の姿態の面白きは、水蒸氣の然らしむるところなるを知らば、三面を山にして土、地濕潤に、水分を含む事殊に濃やかなる京都の朝な夕な、が、いかに變化に富めるかは、説明を須ひずとも明らかなるべし。曾て一夏を北陸の海岸に送れる事ありき。一日驟雨の至れるを見る。疾風さと吹き、浪俄



かくの如き 壯絶
なる 景は
ころなり と

下京
京都市下京區。
吉田
左京區。

向ふに 寝たる
東山は あるかな
さかの 夢より
未だ 覺めやらす



花 賣 (華口山橋)

に高く、黒雲奔りて魔の如く、見るがうちに重なり、て海を覆ふ。浪の音は雲の中にあり、電光閃々、磨る墨の雲間に火花を散らす。浪か、雷か、世界はたゞ一暗黒の中に没し去るか、と疑はれて凄じかりき。かくの如き壯絶なる景は、我が數年滯留中、遂に京都にては見る事を得ざりしところなり。されど下京より吉田に通ひたる朝な、の景色は、今もなほ彷彿として眼前にあるを覺ゆ。引渡す霞に、三條の大橋の擬寶珠の、一つく、彼方へくと淡くなりて、向ふに寝たる東山は、あるかなきかの夢より未だ覺めやらす。吉田の岡に並び立てる松は、墨繪の刷毛の濃く淡く、花賣る少女の姿は隠れて、聲ぞまづ朝靄をも

山科
東山區。

村上の帝
第六十二代。
延喜
第六十代醍醐天皇
のこと。

とこそ 人 申
すめり しか

天曆
村上天皇の御代の
年號(一六〇七
一六一六年)

れ來る。時雨の景色のまたよその國には見られぬさまよ。愛宕の峯を覆ひて白く光りたる薄布の、さては時雨と思ふうちに、はらくと面を撲つ。あはやと驚きもはてず、雲は走りて直ちに東山を包み、何時しかそれも晴れて、今は山科あたりの山巡りするなるべし。かかる優しき景色は山河襟帶の平安京の特色なり。 (國文學全集)

一四 鶯 宿 梅

村上の帝はた申すべきならず。なつかしうなまめきたる方は、延喜にもまさり申させ給へりとこそ人申すめりしか。われをば人はいかゞ言ふなる。と人に問はせ給ひけるに、「ゆるになんおはします。と世には申す」と奏しければ、さてはほむるななり。王のきびしくなりなば、世の人いかゞたへん」とこそ仰せられけれ。いとをかしうあはれに侍りし事は、この天曆の御時に、清涼殿の

なにがしの蔵人にぬ
してはいますがり

色こく 咲きた
木やう だ
美し ぎ
りし を

御前の梅の木の枯れたりしかば、もとめさせ給ひしに、なにがしのぬしの、藏人にていますがりし時うけたまはりて、若きものどもはえ見知らじ。きんぢもとめよ。とのたまひしかば、ひと京まかりありきしかども侍らざりしに、西の京のそこくなる家に、色こく咲きたる木の、やうだい美しきが侍りしを、掘りとりしかば、家あるじの「木にこれ結びつけてもてまゐれ」と言はせたらうびしかば、あるやうこそはとて、もてまゐりてさぶらひしを、なにぞとて御覽じければ、女の手にて書いて侍りける、

救なればいとまかしこし鶯の

やどはと問はゞいかゞこたへん

とありけるに、あやしくおぼしめされて、なにももの家ぞ。とたづねさせ給ひければ、貫之のぬしの御女のすむ所なりけり。遺恨のわざをもしたりけるかな。とて、あまえおはしましけり。

(天鏡)

南蠻寺
京都市四條坊門に
あつた寺。永祿十
一年(二二八年)
織田信長の建立
天正五年(二二
四七年)豊臣秀吉
が天主を破壊さ
れた。南蠻寺の鐘
は、切支丹宗の渡
來は、支丹宗の意
圖に基つたが

一五 蘭學開眼

王城の地に鳴り渡る南蠻寺の鐘の音は、異國情緒を漂はせると共に、我が國文化の轉生を告げる聲であつた。蓋し一國文化の消長は、外的刺戟の強弱によつて左右される。切支丹宗の渡來は、ポルトガル人やスペイン人の東洋キリスト教化の意圖に基づくものではあつたが、その將來した西方の異國文化は、嘗て東洋に類例のない科學文明の精粹であつた。自ら廢類の淵に沈淪した我が國の文化は、この異國文化の洗禮を受けるに及んで、漸く再生の曙光を見る事となつた。



鐘の寺蠻南

泰西の文化は、
四週の海に
漂つた

ギヤマン
ガラス。

日蘭三百年の交
渉それは……も
のであつた

長怖：懐れは：
た：探究に 赴かせ

カピタン(加比丹)
ポルガトル語。

けれども、切支丹宗門の跳梁は政治の當路者の忌諱に觸れて、やがてその布教を禁ぜられ、更にそれが鎖國にまで徹底してしまつた。文化の阻止。まさに流れ入らうとする泰西の文化は、この鎖國といふ政治的禁斷に會して、徒に我が國土を繞る四周の海に漂つた。しかしながら、この峻嚴な鎖國令の下にも、オランダ人との關係は長く續けられ、長崎のオランダ屋敷に、紅毛異人の姿の絶えた事はなかつた。明朗なギヤマンの器物、精緻なオランダ更紗の類、オランダ人はたゞ商賈として我が國人に接した。日蘭三百年の交渉、それは主として通商貿易に限られたものであつた。しかも彼等に對する畏怖、珍奇な紅毛人の智力に對する憧れは、微かながらも我が國人を驅つて、異國文化の探索に、科學知識の探究に赴かせた。

江戸時代の中葉、八代將軍吉宗は洋書の禁を解いた。長崎のカピタンに就いて西洋を知つた吉宗、その音樂に耳を傾けたといふ吉

西洋曆の精密な
のに 驚歎して

青木昆陽
江戸時代中期の蘭
學者、幕府の儒官。
名は敦書。明和六
年(二四二年)六
歿、年七十二。

一人の偉人出
てて 堤を切れ
ば：入來つて：
洗ふ

宗は、西洋曆の精密なのに驚歎して、曆の根本的改正を行つた。そして自ら洋學の獎勵者となつた。青木昆陽はその命を受けて、洋學の研究に先鞭を著けた第一人者となつた。當然知らるべくして知られなかつた洋學は、こゝに堅き扉を開いたのである。泰西文化流入の途は、またおのづからこゝに開いたのである。

一人の偉人出でて堤を切れば、滔々たる文化の流は忽ち入來つて、その國土を洗ふ。近世日本の恩人はまさに將軍吉宗であつた。さはれ未知なるものに接してその眞髓に觸れ、その核心をつかむ事は容易の業ではない。先人の努力は悉くこれに籠められた。耳目に馴れない西方異國文化傳來の劈頭には、これ等先人の慘憺たる辛苦が盡されたのである。

當時に於ける洋學は即ち蘭學であつた。そしてその研究は、まづ文字を解する事から始つた。昆陽は年々長崎から江戸にやつて來

和蘭文字略考は、横文字で書いたものである

私どもは、勤めたるが、事なつてゐる

るカピタンの隨從、オランダ通事を介して、オランダ人から横文字を習つた。また自ら長崎に到つてその學習に努めた。和蘭文字略考は昆陽が習ひ覺えた僅々五六百の語を、子音と母音とを附けるいはゆる「寄せ合せ」の工合から、名詞、動詞、形容詞などといふものを横文字で書いたものであつた。たゞ冠詞、前置詞の類はないが、それは「オランダの語には助辭多くして解しがたし」とて、餘程困難なものであつたらしい。昆陽が長崎に到つた時、オランダ通事たちは、私どもは代々通事の役を勤めてゐるが、横文字を讀む事は禁制になつてゐる。それ故、たゞ耳で聞いて口で言ふだけで、應接の間に欺かれるやうな事があつても押へられぬ。私どもにも横文字を讀む事を周旋して戴きたい」と依頼したといふ。かくて昆陽の斡旋によつて、長崎の通事も横文字を讀む事を許された。蘭學はこゝに江戸と長崎とから興る事となつた。前人未到の學問の領域に足一步踏込め

ば、その悉くが不可解な謎に等しい。これを解かうとしていか程の犠牲を拂ふ事か。そこに先覺者の苦痛がある。昆陽はたゞ一人蘭學の途を歩んだ。しかし、その晩年彼は一人の後繼者を得た。それが前



野良澤である。良澤にはまた杉田玄白、中川淳庵といふ知友が出來た。この三人は相携へて、蘭學事始の辛酸を嘗めたのである。

杉田玄白はオランダ人から解剖の書物を得て、その五臟六腑の圖に疑問を起して、これを實地に究めようとした。そして江戸の南千住にある小塚原に罪人の腑分のある事を聞き、良澤、淳庵を誘つて刑場に到つた。刑場に著いた良澤は懐から一冊の解剖書を取

前野良澤 豊前中津藩の醫師。蘭學鼓吹者の一人。杉田玄白等と有名な解體新書を編譯した。享和三年(一四六三)歿。年八十一。
杉田玄白 若狭小濱藩の醫師。文化十四年(一八二七)歿。年八十五。
中川淳庵 若狭小濱藩の醫師。天明六年(一八二六)歿。年四十八。
南千住 今東京市荒川區。

期せずして……抱
ついて来たのであ
つた

彼等は……讀碎か
うと決意した

解剖圖の初めに
は……あつた

し、これを今日實驗してみたい」と玄白に示した。それは玄白の求めた物と全く同じ解剖書であつた。期せずして彼等兩人は、同じ書物を抱いて来たのであつた。兩者の疑問は相合致し、その研究心は燃えさかつた。腑分の結果は悉く西洋の解剖圖に契合する。そこに寸分の相違のない事を知つて、今更に紅毛異人の卓越した科學的知識に驚歎したのである。こゝに於てか彼等は、オランダの解剖書を讀碎かうと決意した。そして知識慾に燃えた彼等は、その翌日から直ちに翻譯の業に著手したのである。

けれども、舵のない船が大洋に乗出したやうに、文字の知識に乏しい彼等は、全く自由を失つてゐる。こゝに彼等の世にも珍しい翻譯譚の數々が展開されたのである。解剖圖の初めには人の顔があつた。その鼻の所に「フルヘッヘンド」といふ語が出てゐる。ところが良澤が長崎から求めて来た簡略な小冊子の中に、生木を切ると、切つ

蘭學の 研究に
志す者も 數名
これに 加り

解體新書
原書は「ターヘル・
アナトミア」

た跡がフルヘッヘンドする。また庭を掃除して塵を掃溜めるとフルヘッヘンドする」とある。そこで玄白は「生木を切つた跡はもちあがる。塵がたまると高くなる。これは「堆し」と譯したら宜からう」と解いた。「鼻は顔の中で堆い、それは名案である」と言つて、互に鬼の首でも取つたやうに喜び合つたといふ。かゝる苦心のうち、一行の句をただ三人で眺め暮したといふ事もあつた。かくて蘭學の研究に志す者も數名これに加り、月々五六回集會し、研究してゐるうちに、半枚くらの讀めるやうになつた。その喜悅は我等の想像以上のものであつたに相違ない。それを「集會の日を待焦れること、女子供が祭禮を見に行くやうな心持である」と玄白は言つてゐる。そこで良澤が授けて玄白が書く。四年の間に稿を更へること十一回、世に名高い解體新書はかくして出來た。

今より百五十年前、未知未見のオランダ解剖書の翻譯を志して、

彼等の根氣と精力とは到底人間業ではなかつた

僅々四年の間にその業を完成した彼等の根氣と精力とは、到底人間業ではなかつた。近代學術の鼻祖は紅毛人の智力を追ひ、嘗て見ざる慘憺たる辛苦を重ねてこゝに歡喜の日を迎へたが、それはやがて我が國の文化に科學的根柢を築く素地となるものであつた。

言ふまでもなく二人である

解體新書の著作者は、言ふまでもなく良澤、玄白、淳庵の三人である。しかしながら良澤は自分の名を出さず事を肯じない。彼は、私は嘗て筑前の天滿天神に誓つた事がある。自分は蘭學を始めます。どうぞこの業のなるやうに祈り奉ります。私は名聞利益の爲にするのではござりませぬ。その學の實を知り

解體新書卷之一 涵竹文庫 吳氏文庫

若狭杉田玄白 撰
日本 同藩中川淳庵 校
京都石川玄常 世通 参
官醫 京都桂川甫周 世氏 閱

○解體大意篇第一
夫解體之書、所以解體之法也。蓋說形體之名狀、及諸臟之內外、一身之生理、矣。欲其盡之者、無如直朝、見屍、其次、無如、剖。

書 新 體 解

その發意の純眞なる、熾烈なる、研究の熾烈なる、いかに傳ふべきではないか

ワキツツレ 渡守
ワキツツレ 旅人
ワキツツレ 母(狂女)
ワキツツレ 子方
ワキツツレ 梅若丸の亡靈

たいといふ念でござります。といふ神佛に對する誓言を堅く守つたのであるといふ。その發意の純眞なる、その研究の熾烈なる、百世長く傳ふべきではないか。文化轉換の鍵は時代に醒めた人の手に握られる。彼等は常に時代を洞察して、よくその趨勢を馴致して行く。先驅の偉人が遺した功業は、おのづから後世文化の指針となるのである。蘭學開眼。それは近世文化の出現に華々しいスタートをつけたものであつた。

一六 隅 田 川

ワキ詞「これは武藏國隅田川の渡守にて候。今日は舟を急ぎ人々を渡さばやと存じ候。またこの在所にさる子細あつて、大念佛を申す事の候間、僧俗を嫌はず人數を集め候。その由皆々心得候へ。」

かやうに候者
候は都の者に

いかに船頭殿
に候乗らうする

人の親の心云々
一人の親の心は闇
にあらねども子を
思ふ道に迷ひぬる
かな後撰集平
兼輔
聞くやいかに云
云
「聞くやいかに上
はの空なる風だに
も松に音ある習あ
りとは(新古今
乗、宮内卿)

ツレ次第語末も東の旅心、末も東の旅心、日もはるく、の心かな。詞
「かやうに候者は、都の者にて候。我東に知る人の候程に、彼の者を尋
れて只今罷り下り候。道行、雲霞、あと遠山に越えなして、幾關々の
道すがら、國々過ぎて行く程に、此所ぞ名に負ふ隅田川、渡りに早く
著、きにけり。詞、急ぎ候程に、これははや隅田川の渡りに候。また
あれを見れば舟が出で候。急ぎ乗らばやと存じ候。いかに船頭殿舟
に乗らうするにて候。ワキ、なか、の事召され候へまづ、御出
で候あとの、げしからず物騒に候は何事にて候ぞ。ツレ、さん候都よ
り女物狂下り候が、是非もなくおもしろう狂ひ候を見候よ。ワキ、さ
やうに候は、暫く舟を留めて、彼の物狂を待たうするにて候。
シテ、サシ、一聲語、實にや人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に
迷ふとは、今こそ思ひ白雪の、道行人に言傳てて、行方をなにと尋ぬ
らん。聞くやいかに上の空なる風だにも、地語、松に音するならひ

眞葛が原の云々
我がこひは松に
時雨の染めかねて
眞葛が原に風さわ
ぐなり(新古今
集、慈鎮)

四鳥の別れ
四羽の子鳥が各巢
立たうとする時、
母鳥が悲鳴したと
いふ故事(孔子家
語)

なう、我をも
はり候、乗せて給
乗せまじいぞ
とよ、日暮れぬ云々
日暮れぬ云々、
波守、はや舟に乗
れ、日暮れぬ、伊
勢物語

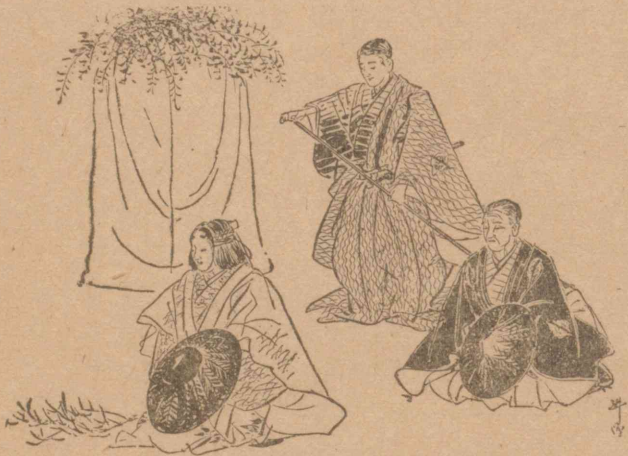
あり。シテ、眞葛が原の露の世に、地身を恨みてや明け暮れん。シテ
「これは都北白河に、年経て住める女なるが、思はざる外に獨子を、人
商人に誘はれて行方を聞けば逢坂の、關の東の國遠き、東とかやに
下りぬと、聞くより心亂れつゝ、そなたとばかり思ひ子の、跡を尋ね
て迷ふなり。下歌地語、千里を行くも親心、子を忘れぬと聞くものを、
上歌、元よりも、契り假なる一つ世の、その中をだに添ひもせて、此所
や彼所に親と子の、四鳥の別れこれなれや。尋ぬる心の果やらん、武
藏國と、下總の中にある、隅田川にも著きにけり。
シテ、詞、なう、我をも舟に乗せて給はり候へ。ワキ、詞、お事はいづ
くより何方へ下る人ぞ。シテ、これは都より人を尋ねて下る者にて
候。ワキ、都の人といひ狂人といひ、おもしろう狂うて見せ候へ。狂は
ずばこの舟には乗せまじいぞとよ。シテ、うたてやな隅田川の渡守
ならば、日も暮れぬ舟に乗れとこそ承るべけれ、語、かたの如くも

名にし負はゞ云
伊勢物語。

あれこそ 沖の
かもめ候よ
浦にては 千鳥と
も言へ かもめ
とも 言へ かもめ
答へ給はぬ など

都の者を、舟に乗るなと承るは、隅田川の渡守とも、覚えぬ事を宣ひそよ。ワキ詞「實に〜都の人とて、名にし負ひたる優しさよ。」シテ詞「なうその詞はこなたも耳に留るものを、かの業平もこの渡りにて、謠名にし負はゞ、いざ言問はん都鳥、我が思ふ人はありやなしやと。詞「なう舟人、あれに白き鳥の見えたるは、都にては見馴れぬ鳥なり。あれをば何と申し候ぞ。」ワキ詞「あれこそ沖のかもめ候よ。」シテ詞「うたてやな浦にては千鳥とも言へかもめとも言へ、などこの隅田川にて白き鳥をば、都鳥とは答へ給はぬ。」ワキ「實に〜誤り申したり。名所には住めども心なくて、都鳥とは答へ申さで、シテ謠沖のかもめと夕波の、ワキ謠昔にかへる業平も、シテ「ありやなしやと言問ひしも、ワキ、都の人を思ひ妻、シテ「わらはも東に思ひ子の、行方を問ふは同じ心の、ワキ、妻を忍び、シテ「子を尋ぬるも、ワキ、思ひは同じ、シテ「こひ路なれば、上歌地謠「我もまた、いざ言問はん都鳥、わが思ひ子は

舟競ふ云々
「ふなぎほふ堀江
の川のみなぎはに
來つゝ鳴くは都
鳥かも一萬葉集
大伴家持



隅田川能舞臺

東路に、ありやなしやと、問へども〜答へぬはうたて都鳥、鄙の鳥とや言ひてまし。實にや舟競ふ、堀江の川の水際に來るつゝ、鳴くは都鳥、それは難波江これはまた、隅田川の東まで、思へば限りなく、遠くも來ぬるものかな。ざりとては渡守、舟こそぞりて狭くとも、乗せさせ給へ渡守、ざりとは乗せてたび給へ。」ワキ詞「かかる優しき狂女こそ候はね、急いで舟に乗り候へ。この渡りは大事の渡りにて候。構へて靜かに召され候へ。」ワキ詞「なう、あの向ひの柳の本に人の多く集まりて候は何事にて候ぞ。」ワキ詞「さん候、あれは大念佛に

この幼き者
路次に捨て
下つて候

父の名字をも
國をも尋ねて候
へば

て候。それにつきてあはれなる物語の候。この舟向ひへ著き候はん程に語つて聞かせ申さうずるにて候。語さても去年三月十五日、しかも今日に相當りて候。人商人の都より、年の程十二三ばかりなる幼き者を買ひとつて奥へ下り候が、この幼き者未だ習はぬ旅の疲にや、以ての外に違例し、今は一足も引かれずとて、この河岸にひれ伏し候を、なんぼう世には情なき者の候ぞ、この幼き者をばそのまゝ路次に捨てて、商人は奥へ下つて候。さる間このあたりの人々、この幼き者の姿を見候に、由ありげに見え候程に、さまざまにいたはりて候へども、前世の事にもや候ひけん、たんだ弱りに弱り、既に末期と見えし時、おことはいづくいかなる人ぞと、父の名字をも國をも、尋ねて候へば、我は都北白河に、吉田の某と申しし人のたゞ獨子にて候が、父には後れ母ばかりに添ひまゐらせ候ひしを、人商人にかどはされて、かやうになり行き候。都の人の足手影も懐かし

しるしに柳を
植ゑて給はれと
おとなしやかに
申し

舟が著いて候
念佛を申さうず
るにて候

う候へば、この道のほとりに築籠めて、しるしに柳を植ゑて給はれと、おとなしやかに申し、念佛四五返唱へ遂に事終つて候。なんぼうあはれなる物語にて候ぞ。見申せば船中にも少々都の人も御座ありげに候。逆縁ながら念佛を御申し候ひて御弔ひ候へ。由なき長物語に舟が著いて候。とう／＼御上り候へ。ツレ詞いかさま今日はこの所に逗留仕り候ひて、逆縁ながら念佛を申さうずるにて候。ワキ詞、いかにこれなる狂女、何とて船よりはおりぬぞ、急いで上り候へ。あら優しや、今の物語を聞き候ひて落涙し候よ。なう急いで舟より上り候へ。シテ詞、なう舟人、今の物語は何時の事にて候ぞ。ワキ「去年三月今日の事にて候。シテ、さてその兒の年は。ワキ、十二歳。シテ「主の名は、ワキ、梅若丸。シテ、父の名字は。ワキ、吉田の某。シテ、さてその後は親とても尋ねず、ワキ、親類とても尋ね來ず、シテ、まして母とても尋ねぬよなう。ワキ、思ひもよらぬ事。シテ、なう親類とても親と

その幼き者こそ
子にては候へ
とよ
あら 浅まし

道のほとり云々
〔化して路傍の土
と作り、年々春草
生ず。〕〔白氏文集〕
この下
こそあるらめ
見せさせ給へ
や

ても尋ねぬこそことわりなれ。その幼き者こそ、この物狂が尋ねる子にては候へとよ。なうこれは夢かや、あら浅ましや候。ワキ詞、言語道断の事にて候ものかな。今まではよその事とこそ存じて候へ。さては御身の子にて候ひけるぞや、あら傷はしや候。かの人の墓所を見せ申し候べし、こなたへ御出で候へ。シテ謡、今まではさりと逢はんを頼みにこそ、知らぬ東に下りたるに、今はこの世になき跡の、しるしばかりを見る事よ。さても無慙や死の縁とて、生所を去つて東の果の、道のほとりの土となりて、春の草のみ生ひ茂りたる、この下にこそあるらめや。地謡、さりとては人々この土を、かへして今一度、この世の姿を、母に見せさせ給へや。上歌、残りても、かひあるべきは空しくて、あるはかひなき帚木の、見えつ隠れつ面影の定めなき世の習ひ、人間憂ひの花盛り、無常の嵐音添ひ、生死長夜の月の影、不定の雲覆へり。實に目の前のうき世かな。

たゞ念佛を御
申し候ひて 後世
を御弔ひ候へ

母の 弔ひ給はん
をこそ 亡者も
喜び給ふべけれ

ワキ詞、今は何と御歎き候ひてもかひなき事。たゞ念佛を御申し候ひて、後世を御弔ひ候へ。謡、既に月出で川風も、はや更け過ぐる夜念佛の時節なればと面々に、鉦鼓を鳴らし勸むれば、シテ謡、母は餘りの悲しさに、念佛をさへ申さずして、たゞひれ伏して泣きゐたり。ワキ詞、うたてやな餘の人多くましますとも、母の弔ひ給はんをこそ、亡者も喜び給ふべけれと、謡、鉦鼓を母にまゐらすれば、シテ謡、我が子の爲と聞けばげに、この身も鳧鐘を取りあげて、ワキ謡、歎きをとどめ聲澄むや、シテ、月の夜念佛もろともに、ワキ詞、心は西へと一すぢに、シテ、ワキ謡、南無や西方極樂世界、三十六萬億、同號同、名阿彌陀佛、地、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。シテ、隅田河原の波風も、聲立て添へて、地、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。シテ、名にし負はゞ、都鳥も音を添へて、子方地、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。シテ詞、なう、今の念佛のうち、まさしく我が子の聲の聞え候。

今一聲こそ聞かまほしけれ

母にてましますか

見えつ 隠れつ

この塚の内にてありげに候よ。ワキ詞我等もさやうに聞きて候。所詮此方の念佛をば止め候べし、母御一人御申し候へ。シテ謠今一聲こそ聞かまほしけれ。南無阿彌陀佛、子謠南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と、地聲のうちより、幻に見えければ、シテあれは我が子か、子母にてましますかと、地互に手に手を取交せば、また消えくとなりに行けば、愈思はます鏡、面影も幻も、見えつ、隠れつする程に、東雲の空もほのくくと明け行けば跡絶えて、我が子と見えしは塚の上の、草茫茫として、たゞしるしばかりの淺茅が原と、なるこそあはれなりけれ、なるこそあはれなりけれ。

自慥文

能面の趣味

能面に就いてお話しませう。

新能
陰曆二月に奈良興
福寺で七日間ついで
けて行つた春日神
社の神事

口跡
役者のせりふ。

ギリシヤの昔には盛んに面を用ひたものです。いや、どうして能面のやうな小さなものではない。能樂も昔は薪能たきいのうなどといつて、野天の芝の上でやつた事もなかつたではないが、ギリシヤのは國民全體の娛樂の爲に野外でやるのが普通で、その舞臺はなかなか大きいから、後の方からは口跡くちざが聞えず、また普通の顔や面では小さくて見えないといふ恐れもあつたから、その面は随分大きくこしらへたものでありました。しかし、面は主に人間以外のものを表す爲に必要なものであるから、ギリシヤの劇がその後進歩して、複雑な人間社會の事を仕組むやうになつて來てからは、だんく、假面も廢れて、今ではヨーロッパの芝居には面を用ひる事は殆どありません。たゞ中世から近世にも、素人芝居の催などには随分面を著ける事もあります。これは顔を隠すとか何とかいふ考から出た事で、假面劇といふやうなりつばな藝術として立つものではないやうに思はれます。

靈格
神靈たる性格。

それに反して、能樂の面の任務は非常に重いものやうに考へられます。面の使用は一つは遠方から見ても明瞭な表象を與へるやうにとの意、一つは人間以上の靈格を表す爲に必要といふ事から起つたものではありませうが、少くとも今日までに發達して來た能樂の趣味の一部は、この面の上にも掛つてゐる事と思ひます。能樂の趣味は單純の趣味であります。單純と幼稚とは違ひます。誤解のないやうに言改めたら、純潔の美といふのが能樂の特色と申して宜しいでせう。ギリシヤの古劇は複雑な寫實に進んだから假面を捨てたのですが、能樂は愈々純潔の美を發揮させる爲に、複雑な情を表す役者の顔を避けて、一曲の總調を表した一枚の假面だけで始



(翁) 面 能

そつがない
ぬげ目がない。

終を遂げさせるやうにしたものと思はれます。私には面の表情は分りませんが、どうもそれ／＼の面には、その用ひられる一曲の全般を煎じ詰めて、それをその面に表象したものかのやうに思はれて面白く感じます。面を著ければ、悲しい時も嬉しい時も同じ顔



(食 喝) 面 能

附ばかりしか見せられぬので、をかしいぢやないかといふ人もあります。それは一應尤もとも聞えますが、私はこの方が變化を與へようとして卻つて、卑俗に陥るよりは餘程ましだと思ひます。舞臺は白木造で、京も鎌倉も、内も外もそのまゝ變化を施さないで、その心持を與へると同じ主意でせう。とかく能樂は舞臺でも藝でも面でも、そつのないといふのが特色と思ひます。巧な事を求めようとして、なまやかな眞似をすると、張

氣合が全舞臺云々
張詰めた心持が舞
臺いっぱい満ち
てゐる。

面打
面を作る人。
氣合のかゝつた人
張詰めた心持の身
體に充ち満ちた人。

詰めた精神が脱けます。何時も氣合が全舞臺にかゝつてゐなく
ては、能樂の品性はなくなりません。そして人間の顔面は一番大切
なものであるから、その充足した氣合を何時も保つてゐるやう
な上作の面が必要になるのです。上作の面は面打自身が品性高
潔で、氣合のかゝつた人で
なければ出来がたいので
あります。古作、中作にも結
構なものもあります。今
後の新作にもそんななりつ
ばなものが出来ませうとい
かね。能樂の盛行と共に、一
人や二人はあつてもよささうに存じますがね。



(若敷) 面 能

一七 小野の御室

一 小野の御室

昔、惟喬親王と申す皇子おはしましけり。山崎のあなたに水無瀬
といふ所に宮ありけり。年ごとの櫻の花盛には、その宮へなんおは
しましける。その時、右の馬の頭なりけ
る人を、常にゐておはしましけり。狩は
懇にもせで、大和歌にかゝれりけり。今
狩する交野の渚の院の櫻殊におもし
ろし。その木のもとにおりて、枝を折
りてかざしにさして、皆歌詠みけり。馬
の頭なりける人の詠める、



(載所本版古) 櫻の院の渚

よの中にたえて櫻のなかりせば
春のこゝろはのどけからまし

また人の歌

惟喬親王
第五十五代文徳天
皇の第一皇子。小
野宮と申す。
山崎
今京都府乙訓郡大
山崎村。
右の馬の頭
在原義平。
大和歌に、かゝ
れりけり。
交野
今大阪府北河内
郡牧野村にあつた。
なかりせば、
し、のどけからま

夜ふくるまで
物語して

大殿ごもり給ひ
なんと

月のかくるゝ
か

入れずもあ
らなん

小野
今京都府愛宕都
比叡山の麓

聞えさせけり
さてもさぶら
ひてしかな

散ればこそいと櫻はめでたけれ

うき世になにか久しかるべき

歸りて宮に入らせ給ひぬ。夜ふくるまで物語して、さてあるじの皇子入りて、大殿ごもり給ひなんとす。十一日の月も隠れなんとすれば、かの馬の頭の詠める、

あかなくにまだきも月のかくるゝか

山の端にげて入れずもあらなん

かくしつゝ、詣で仕うまつりけるを、皇子思の外に御髪おろさせ給ひて、小野といふ所に住み給ひけり。正月に拜み奉らんとて詣でたるに、比叡の山の麓なれば、雪いと高し。しひて御室に詣で、拜み奉るに、つれづれといとも悲しくておはしましければ、稍久しくさぶらひて、古への事など思ひ出でて聞えさせけり。さてもさぶらひてしがなと思へど、公事どもありければえさぶらはで、夕暮に歸る

とて、

忘れては夢かと思ふ思ひきや

ゆきふみわけて君を見んとは

と詠みて、泣くゝ歸りにけり。

二 東下り

昔、男ありけり。その男、身を益なきものに思ひなして、京にはあらず、東の方に住むべき國もとめにとて行きけり。もとより友とする人、一人二人して行きけり。路知れる人もなくて、惑ひ行きけり。三河國八橋といふ所に至りぬ。其所を八橋といふ事は、水のくも手に流れ分れて、木八つ渡せるによりてなん八橋とは言ひける。その澤のほとりの木蔭におりて、鯛くひけり。その澤に燕子花いとおもしろく咲きたり。それを見てある人のいはく、かきつばたといふ五文字を句の上にすゑて、旅の心を詠め、と言ひければ詠める、

路 知れる人も
なく 惑ひ行
きけり

八橋
愛知縣碧海郡知立
町の字

木八つ 渡せるに
よりてなん八
橋とは 言ひける

から衣きつゝ馴れにしつましあれば

はるくゝ來ぬるたびをしぞ思ふ

と詠めりければ、皆人、餉の上に涙落して、ほとびにけり。

行きくゝて駿河國に至りぬ。

富士の山を見れば、五月のつごもり

に雪いと白う降り。

時しらぬ山はふじの嶺

いつとてかかのこまだらに

雪の降るらん

その山はこゝにたとへば、比叡の山

を二十ばかり重ねあげたらん程して、なりは鹽尻のやうになんありける。なほ行きくゝて、武藏國と下總國との中に、いと大きな河あり、それを角田河と言ふ。その河のほとりに群れるて思ひ遣れば、



(載所本版古) 士 富 の 月 五

鹽尻のやうに
なんありける

來にけるかな
日も暮れな

限りなく遠くも來にけるかなとわびあへるに、渡守はや舟に乗れ。日も暮れな」と言ふに、乗りて渡らんとするに、皆人ものわびしく



(同 前) 渡 の 川 田 隅

て、京に思ふ人なきにしもあらず。さるをりしも、白き鳥の嘴くちばしと脚とあかき、しぎの大ききなる、水の上に遊びつゝ、いををくふ。京には見えぬ鳥なれば、皆人見知らず。渡守に問ひければ、これなん都鳥」と言ふを聞きて、

名にしおはゞ

いざこと問はん都鳥

わが思ふ人はありやなしやと

と詠みければ、舟こそぞりて泣きにけり。

(伊勢物語)

一八 姫小松(今様)

蓬萊山

蓬萊山には千年経る

萬歳千秋かさなれり

松の枝には鶴巢くひ

巖のそばには龜あそぶ

姫小松

君を始めて見る時は

千代も經ぬべし姫小松

お前の池なる龜岡に

鶴こそ群れゐて遊ぶなれ

一天四海

治まりなびく時なれや

一天四海のうちのみか

人の國まで日の本の

もろこしが原もこの所

松の木蔭

松の木かげに立ちよれば

千歳の縁は身にしめど

松が枝かざしにさしつれば 春の雪こそふりかゝれ

一九 美術に現れた日本國民性

藤懸 靜也

美術は一國文明の華の開いたものであつて、一國の文化はその國民性を背景とするに至つて、始めてその光輝を發するものである。過去を顧みれば、一國の文化には、その國民性を背景とした大きな流が明瞭に認められる。

現代に於ては、自身がその社會の渦中にあつて、いろ／＼な文化の傾向を見てゐる爲に、いかなる文化が眞にその國民性に適應すべきものか判定に苦しむ事がある。例へば、繪畫に例を取るならば、舊來の日本畫と油繪とに於て、青年は油繪の方が日本の國民性に適すると言ふかも知れないし、中年以上の者は、日本畫の方が適するだらうと考へるかも知れない。しかし、それは人々の考へやうで、

藤懸靜也
美術批評家。文學博士。東京帝國大學教授。明治十四年茨城縣に生れた。

過去を顧みれば、
流が明瞭に認められる。

油繪の方が日本の國民性に
適する。

多く親しんで
る人々には油
繪が好まれ
るが、吾人は
それ故に考へ
ねばならぬ

遺作が極めて
乏しいので、分
らぬ事柄は、委
しい事柄は、分
らぬ

歐米の思想や文物に多く親しんでゐる人々には油繪が好まれ、中
年以上で、多く日本のものを見てゐる人々には日本畫が好まれる
のである。それ故、吾人は趣味の偏した人の説を避けて、日本國民全
體の上から、その文化や趣味の傾向を別に考へねばならぬ。それに
は過去の時代に遡つて、その時々々の文化の變遷を見、藝術の變化の
跡を尋ねると、美術に現れた日本國民性のいかなるものであるか
をも考察する事が出来る。いざ吾人をして、我が日本の古い時代か
らの繪畫の變遷に就いて一瞥せしめよ。
さて我が國の古代にいかなる藝術をもつてゐたか、遺作が極め
て乏しいので、委しい事は分らないが、元來我が國民は風光明媚な
山川の風趣に恵まれて、藝術をよく理解し、味はふ力をもつてゐた。
それ故、一たびすぐれた大陸藝術に接すると、勃然として藝術の振
興を見、自己獨特の長所を發揮するやうになつたのである。

六朝式
西紀四二〇年から
五八九年までの間
に支那で六つの朝
廷が興亡した時代
に起つた藝術の様
式。
太子が...盡され
たのは...基であ
る

天平期
第四十五代聖武天
皇の御代(一三三
八—一四〇八年)

我が國に遺存する最古の優秀な藝術品としては、推古天皇時代
のものを挙げねばならぬ。これ等の藝術品には、内地で作られたも
のもあれば、外國から傳來したものもある。しかし、いづれにしても、
いはゆる六朝式のもので、言ふまでもなく、聖徳太子の偉大な力に
よつて興隆したのである。太子がその當時出來得る限り大陸の文
明を吸収して我が國の文化開發に盡されたのは、我が國の文明と
隆運との開かれた基である。この時に於ける我が文明の變化は、明
治維新に際し歐米文明の影響を受けて變化したよりも、更に著し
く大陸文明に化せられた事であらう。大和の法隆寺や、其所の寶物
を見ると、當時の盛觀がしのばれるのである。
次の奈良時代はいはゆる天平期を最盛の時期とし、建築にも、彫
刻にも驚くべき發達を遂げた。これ即ち唐朝の進んだ文明が、直接
我が國にはいつたからである。推古天皇時代の美術が一躍して奈

隋 六朝の次の時代。西紀五八九年から六一七年まで。
唐 西紀六一八年から九二二年まで。我が推古天皇から醍醐天皇までに當る。

支那思想もまた我が思想界を風靡したに違ない。

良時代の美術になるには、その變化が餘りに大き過ぎるけれども、支那では六朝式から隋の過渡期を経て唐朝式となつたのである。今我が國では六朝式を朝鮮から入れて、次に直接に唐の美術を輸入したので、推古天皇時代と奈良時代との美術に著しい相違を來したのである。唐の文化が入れば、世はまたこの新文明を追うて、すべての建築、調度類から、日常生活の様子まで唐風になつたであらう。随つて支那思想もまた我が思想界を風靡したに違ない。しかし、かやうな風潮に乗じたのは、その當時に於ける宮廷及び貴族の一部のみであつた。都會を一步離れれば、國民の文化は極めて低く、無智蒙昧な者も多かつたであらう。しかし、この唐朝文化の影響によつて、我が文化の根柢は益々堅くなつた。

平安時代の初期はなほ唐の影響を受けてゐたが、その中期から、日本國民としての自覺を喚び起し、外國文明から離れて、我が國の

これ實に我が文化の尊い所以である。

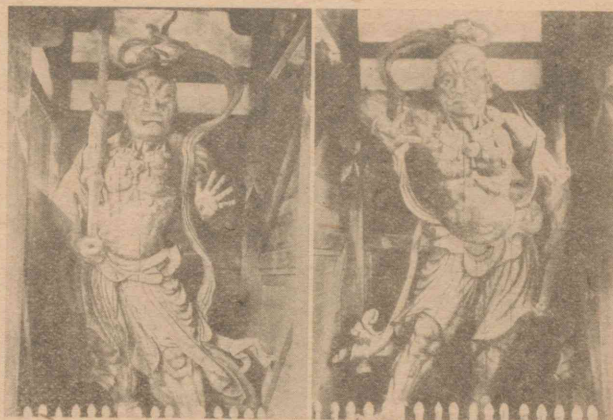
してみると我が日本文化の基礎は早くあつたのである。

特色ある文明を成すに至つた。これ實に我が文化の尊い所以である。その頃から國文學が起つて、漢文學に對立するやうになり、藝術に於ても、支那には見る事の出來ない特殊な流風が起つて、更に鎌倉時代にこれを完成した。してみると、我が日本文化の基礎は、早く古代からあつたのであるが、推古天皇及び奈良時代に外國の影響を受け、それを純日本化して、我が國獨特の精華を發揮したのは、平安及び鎌倉時代である。

平安時代は宮廷及び搢紳たちの文化であつたが、鎌倉時代には更にその範圍が廣まつて普遍的性質を帶び、國民的藝術の發達に向つた。彫刻に就いて言へば、天平時代はその精を極め能を盡してゐるが、これ實に唐朝彫刻の模倣である。然るに平安時代の終りに定朝（じやうてう）が、鎌倉時代には運慶、湛慶が出て、木彫界に一大進展をなし、こゝに純日本彫刻が出現した。またこれを繪畫の方で考へれば、

定朝 有名な佛師。一條天皇から後一條天皇頃（一六四七—一六九六）の人。

如拙 畫僧。西海の人。足利義滿頃(二〇二八—二〇五四年)の人。
 周文 近江の人。如拙の門人。應永(永享一〇〇年)の人。
 雪舟 畫僧。名は等楊。備中の人。永正三年(二一六六年)歿。年八十七。
 狩野派 明應頃(二一五二—二一六〇年)狩野正信に始まり、その子元信は絶世の大家と稱せられた。
 曾我 曾我蛇足(應仁、二八年中)の人。一、二、八年中(七)を祖とする。
 雲谷 雪舟を祖とする。



東大寺南大門の二王象

早く佛畫は精妙な域に達してゐたけれども、平安時代に國文學の發達に關聯して、純鑑賞的の繪畫が現れた。この流は、平安の末から鎌倉初期に至つて益々榮え、遂にいはゆる大和繪の一體を成すやうになつた。
 然るにその後、鎌倉時代の末から足利時代へかけて、藝術界に特殊な一派を生じた。即ち當時の新派で、支那からはいつて來た宋元水墨畫の一體で、禪宗趣味と關聯して、我が藝術に一新様を劃した。この派には如拙、周文、雪舟などの大家が出てその根柢を作り、狩野派が榮え、曾我、雲谷諸派を生じ、舊來の大和繪は全く勢力を失つた。

これ：盛んになつたのである

これ等の人は：發揮して：満足すべくもない

足利義滿から同義政の時代は、この流派の最も盛んな時で、水墨減筆の一體が旺盛を極めたが、これまた當時の貴族たる武家の趣味から盛んになつたのである。
 然るに世は戰國時代となり、舊來の貴族が下々の者から滅され、いはゆる下剋上で、こゝに日本の社會に一大變革を來した。即ち尾張の一農民が關白太政大臣となつて、一躍人臣の榮位を極めたのをはじめとして、英雄豪傑は徒手空拳で一國一城の主となつた。これ等の人は天真爛漫の趣味を發揮して、舊來の如き禪味を帯びた藝術では満足すべくもない。しかもこれ等の人々は支那の學問が



雪舟筆山水圖

種彩色の
物などが
描かれた
がまた、
風俗畫
が起つた

安土桃山
織田信長及び豊臣
秀吉の時代、前江
は信長の據城、近江
國(滋賀縣)蒲生
郡安土城により、
後者は秀吉の據城
山城國(京都府)よ
り伏見の桃山城によ
つて稱せられる。

文學藝術は鬱然
として興り、
發展させた



山樂榮鳥圖

なく、支那趣味を解しないから、俗眼を奪ふやうな華麗を極めたものでなければ喜ばない。こゝに於てか極彩色の花鳥動物などが描かれ、また當時の社會状態を描いた新しい風俗畫が起つた。

されば安土桃山時代はわづかに三十年間に過ぎなかつたけれども、近世藝術の基礎を置いた時期であるから、頗る重要な時代と言はなければならぬ。しかもこの時代は、日本の文藝復興の時期とも稱する事の出来る時で、江戸時代の文化の基をなすものである。

江戸時代三百年間は、泰平の餘澤で文學藝術は鬱然として興り、益々日本趣味を發展させ

光琳
尾形光琳。時繪師
で畫を善くした。
京都の人。享保元
年(二三七年)も
歿(二五九年)も
七十六ともいふ。
抱一
酒井抱一。俗名は
忠因。出家して文
証といつた。姫路
城主酒井忠仰の二
男。諸派を學び、
後一變して光琳風
を描いた。文政十
一年(一七八八年)
歿、年六十八。
圓山
圓山應舉に始つた
日本畫の一派。寫
生を主とした。
四條
寛政(二四九一
二四六〇年)頃
松村吳春(月溪)に
始つた日本畫の一
派。

た。そして繪畫は殊に隆盛で、幾種もの流派を生じ、藝術の燦爛たる花の時期となり、我が日本藝術の盛んな時代を現出した。

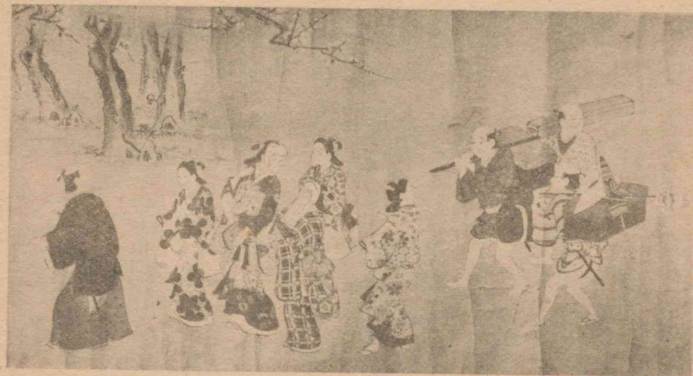
光悦に始り、宗達、光琳を経て抱一に至る一派の如きは、その範を大和繪に取り、更にこれを醇化したものである。また近世初期の風俗畫の一體の如きも、やはり範を鎌倉時代の繪卷物に取つてゐる。江戸趣味の上に作られた浮世繪版畫は平民の藝術として頗る榮えた。その他圓山、四條の諸派も、江戸時代に於ける特殊な畫風である。わづかに長崎からはいつて來た西洋の畫風は餘り行はれず、支那の南宗畫は文人の間に行はれた。しかし、江戸時代



宗達筆源氏物語關屋圖

日本藝術は：：外
來の作風に：：傾
いて：：日本の趣
味に復つた

油畫も：：外國の
ものとは：：違は
ねばならぬ



宮川長春風傳圖

は實に日本藝術の癡として華麗な花を開いた時である。

明治になつて西洋藝術の影響を受け、こゝに日本藝術の上に一大變革を來した。日本藝術は過去に長い歴史をもつてゐるので、一時は外來の作風に傾いても、暫くして日本的趣味に復つた。現代は各個人の考によつて、思ひ／＼の藝術をなしてゐる。舊來の日本畫も、新來の油畫も共に榮えてゐるが、油畫も日本に於て描かれる以上は、日本の特色を發揮すべきで、外國のものとは違はねばならぬ。實に現代に於ては、日本的趣味に傾いたものが少くない。また日本畫も舊來のもの

現代の藝術も
また：：現に
かなりつゝある
のである

外國の藝術を
日本化するの
は：：大きな流
があるからである

藝術趣味は：：異
なるものである
から

は違つて、面目を一新した。

これを以て見ると、日本藝術は常に大陸藝術の影響を受けては日本化し、更にまた大陸の影響を受けては日本化して進歩發達したのであつて、現代の藝術もまた外國藝術を更に日本化するに於て優秀なものとなり、外國にも見る事の出來ない特殊な藝術となるべきで、現にかなりつゝあるのである。

かくの如く外國の藝術を日本化するの、即ち國民性を背景として、の大きな流があるからである。その文明は日本人の祖先以來承繼いで來た獨得のもので、知らず識らずの間に日本人の趣味、性格の上に大なる影響を與へてゐる。古代よりの日本文化を觀察すると、この大きな流が藝術の上に驚くべき力をもつてゐる事が明らかに認められる。しかし、藝術趣味はそれ／＼人によつて異なるものであるから、各その好に隨つて藝術を鑑賞し、製作すべきであ

誇り得るものは：
國民性によつて
作られたらね
物でなければなら

國民性が 國土の
恩恵に 支配さ
れる事は

つて、かくてこそ相異なる幾多の流風を生じ、こゝに始めてその國の藝術は榮えるに至るのである。しかもよく一國の藝術として誇り得るものは、外國藝術の模倣ではなくて、その國民の文化を背景とし、國民性によつて作られた作物でなければならぬ。

これを要するに、一國の藝術は、その國民の藝術思想を現したもので、言換へれば、國民性の現れである。國民性はその國民の文化の程度によつて種々な相違を來すであらうが、またその國土の如何によつて大きな相違を生ずるであらう。實に國民性が國土の恩恵に支配される事は、蓋し少くない事であらうし、藝術もまた國土の恩恵に浴する事は、蓋し莫大であらう。藝術上に於ける自然模倣は頗る重要視されるが、自然模倣の上には、國土の恩恵を最も考慮すべきである。

國土が一國文化の上に及す力が偉大であつて、國民性もその支

變化を受けても
は：特色に復る

倉橋惣三
倫理學者、教育家。
東京女子高等師範
學校教授兼文部省
社會教育官。明治
十五年靜岡縣に生
れた。

配を受け、藝術もまた國土の恩恵に浴すとすれば、推古や奈良や室町の時代に外國藝術の影響を受けて、その内容や形式の上に大きな變化を受けても、若干の時を過ぎれば、その國土固有の特色に復るのは疑のないところで、以上述べた事實がよくこれを證明してゐる。たとひ外國文化の影響によつて、國民性に變化を生じても、決して外國文化そのものと同じにはならない。必ずやその國土の力、國民性の力によつて變化せしめられる。これ藝術がその國々によつて異なり、時を異にすればまたその藝術にも大なる相違を來す所以である。そして、その間に動かすべからざる脈絡をもつのは、即ち國土の力と、その中に働いてゐる國民性の力とによるのである。

二〇 節供と家庭

倉橋 惣三

女の子の爲に三月の雛祭があり、五月端午の節供を男の子の爲

お祝をする事は、年中行事で深い趣

骨董的な性質のものでもなく、意味の

一年に一日の子供日は、あります

にあてて、日本全国津々浦々まで、國中舉つて子供の爲にお祝をするといふ事は、まことに趣の深い詩的な年中行事で、子供の爲に大層幸福な事であります。

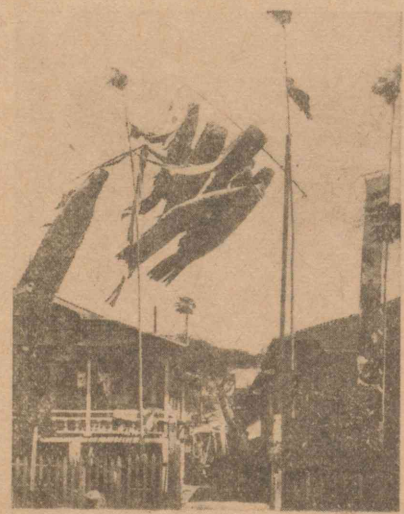
雛祭も、端午の節供も、子供の爲の祝日です。大人の弄ぶ骨董的な性質のものでもなければ、風流といふやうな意味のものでもなく、一家が専ら子供の爲に喜ぶといふ事が中心にならなければなりません。その歴史的由來がたとひどうであらうとも、新しい意味に於て、我が國に存在する一年に一日の子供日は、さういふやうにありたいのであります。



(筆子有古口山) 遊 雛

すべて子供の爲の喜とか祝とかいふやうな事は、家庭的性質の

端午の節供の如きものは、家庭的性質のもので、ありません



供 節 の 午 端

ものでなければなりません。かのクリスマスなども、我が國では子供の爲に、家庭内で喜び楽しむといふよりも、寧ろ社會的傾向を帯びてをりますが、本來は家庭内に於て、一家團樂、温かい愛の光に融合ふといふ事でなければならぬのであります。

さういふ意味から見て、端午の節供の如きも、徹頭徹尾、家庭的性質のもので、その中にはおのづから家族意識或は家庭感情といふものが伴なつて、子供心に家庭とか、家族とかいふ優しい情緒を養ふ爲に有效なのであります。例へば、家内中の人たちが嬉々として武者人形を飾つて下さるとか、或は父や兄が長い竿を立てて鯉轍をつり上げて下さる

柏の葉は、裏につけて来たものであり

家庭的な、そして教育的な情味

子供に…感じがない、甚だむづかしいのであります

とか、一方には母や姉が一所懸命になつて柏餅をこしらへて下さる。その柏餅を包む柏の葉は、裏の山からみんな取つて来たものであり、柏餅に作る米の粉は、祖母さんが数日前から、せつせと挽臼で挽いて下すつたのだといふやうなところに、言ふに言はれぬ家庭的な、そして教育的な情味を含んでるのであります。
お祝が家庭的であるといふのは、祖先を敬つて自分の一家を愛する感じを子供に起させるのにまことに都合がよい。三月の雛祭にしても同じ事ですが、五月節供の武者人形でも、古くから我が家に傳はつてゐる人形を土藏から出して来て飾るといふやうなところに、何等の説明も講釋もせずとも、我が家の古い歴史を尊ぶ感じを興へる事が出来るのであります。
今日の如き時代にあつては、子供にかういふ方面の「我が家」といふ感じが缺けてをりますし、また平素かうした感じを養はせると

買つてやるよりも、望ましいのであります

いふ事は、甚だむづかしいのであります。かういふ感じを持つといふ事は、子供の堅實な情緒を養ふ上に甚だ有効な事で、且是非とも必要な事であり、けれども餘り祖先崇拜的な嚴肅な形で子供を強ひる事は、その割に效がないのであります。かういふ特別な一日の愉快な気分の中に、我が家の歴史といふやうな感じを興へる事が出来ると思へば、この一日を大いに利用したいもので、この意味から言へば、新しい人形や飾物を澤山買つてやるよりも、古い物を保存して用ひる事が望ましいのであります。
古い物を保存して用ひれば、お節供が年々繰返されて行く事によつて、子供は自分の生れた時のいはゆる初節供からの人形が並べられるのを見て、別に説明せずとも、最も愉快な、そして具體的な自分の生立の感じを味はふ事が出来ます。それが爲に、子供は自分の小さい時の事を考へるといふやうな感情的な事はなく、また考

さつぱりした
明るい氣持

國家といふ
感じを子供
の心に
入れる

かういふ
程の感じを
起させる
ものは
ありません

へさせるやうではいけません。さつぱりした明るい氣持の中に、自分の生れた時から、親たちがかうして愛して下さつたといふ感じを持つものであります。

前に述べた意味を一步進めると、國家といふ感じを、極めてあどけない子供らしい意味に於て、子供の心に入れる事が出来ます。鎧とか、冑とか、太刀とか、武者人形とか、五月節供の飾物に就いて、今日の時代では、それを知識的に子供に教へる必要はないかも知れませんが、かういふもの程、極めて自然的に、國家といふ感じを起させるものはありません。鎧、冑、武者人形等に對する子供の心持は、極めて具體的な感情に充ちて來て、一種堅實な情緒を養ふ事が出来るのであります。

さういふ意味からして、飾物には昔風の物が好ましいと思ひます。餘り現實的、寫實的意味のものよりも、やはり昔のものがよいと

この日に限つ
て、教育を
へねばならぬ

桃の花 咲く
一日に
雛の子の
飾供が
ある

思ひます。必ずしも牛若や、辨慶や、金太郎ばかりを選べといふ意味でなく、さういふものによつて、習慣的に起されてゐるこの日の或感じを保存したいのであります。特にこの日に限つて、かういふ教育を與へねばならぬといふやうな子供に強ひる意味でなしに、この日の價值を認めねばならぬと思ひます。

それから別段何といふ譯合とか理窟ではありませんが、この日の與へるところの一種獨特の氣分といふものを理解し、また保存する必要ががあります。

桃の花咲く長閑な春の一日に、女の子の爲に雛の節供があり、新緑爽かな初夏の一日に、男の子の爲に端午の節供があるといふ事は、言ふに言はれぬ季節の面白味があります。更に細かく考へて見ますれば、雛祭のどこまでも女性的なのに引換へ、端午の節供はあくまでも男性的で、一方の草餅、櫻餅には優しい風情があります。

は：用ひる上に
分が：剛健な
あります

一方の柏餅や鋭い太刀のやうな菖蒲の葉を用ひる上には、何とな
く男らしい剛健な気分があります。殊に雛祭は室内的であります
が、端午の節供は戸外に高い鯉幟を吹流して、子供にいはゆる皐月
晴の快活な空を仰がせるといふところに、かうした気分上の感化
のあるのを見のがしてはなりません。

二一 臺所の經濟說

森本厚吉

森本厚吉
經濟學者。法學博
士。女子經濟專門
學校長。明治十年
京都市に生れた。
しかし、それは
大なる誤解であ
ると思ふ。

婦人は消費者であつて生産者でない、家庭は消費の場所であつ
て生産の場所でない、一般に考へてある者が少くない。しかし、そ
れは大なる誤解であると思ふ。そして、この間違つた説が正される
までは、日本の婦人問題、延いて國民生活問題の解決を十分に見る
事が出来ないと思ふ。

私は婦人は男子と同様にりつばな生産者であり、家庭は消費の

家庭は：生産の
場所であつて
臺所は一種の
生産工場であ
ると信ずる

婦人が：輕視さ
れるのは何等の
理由もないの
である

資本主義が盛ん
で富國強兵が
最高理想であつ
た

場所であると同時に生産の場所であつて、臺所は一種の生産工場
であると信ずる。そのみならず、我が國には今日九十六萬の工業
婦人労働者が、純然たる生産事業に従事してゐるが上に、近頃では
各種の職業婦人が盛んに活動してゐる。それに加へて、家庭に於て
さへ、婦人は嚴密な意義で富の生産者である事を、學理上認めざる
を得ないのであるから、いかに生産萬能の經濟であつても、婦人が
消費者であるとして輕視されるのは、何等の理由もないのである。
然るに今までの我が國の婦人が、經濟界に處して殆ど無能者であ
ると考へられてゐたのは、抑、何故であらうか。

資本主義が盛んで、富國強兵が經濟の最高理想であつた時代に
於ては、大仕掛の機械生産にたづさはる事の出来ない婦人、また先
天的に強兵たり得ない女性が社會から輕視されて、男子より一段
劣等なものとして取りあつかはれたのは、止むを得ない事である。

：意味が認められたのであるから、この時期に到達したのである

臺所は生産工場である、事は勿論である

後者は機械的生産であるのに、前者は手工生産に過ぎない

けれども、今や新しい經濟學說に於ては、婦人の家庭労働もまた、一種の重要な生産であるといふ意味が認められたのであるから、婦人の地位が自然大いに高まりゆく時期に到達したのである。

元來生産とは、無から有を創造する事ではない。それは物理學の原則の示す通り、人力には不可能な業である。經濟學でいふ生産とは、單にものの效力、即ち人の欲望を満足させるものの力を造り出す事を言ふのである。料理屋で價格一圓の食物を家庭で六十錢で作し得たとすれば、差引四十錢は家庭で生産された效力の價値である。そして臺所はこれ等の生産が行はれてゐる重要な生産工場である事は勿論である。

然るに同じ生産であつても、家庭の生産工場を社會の産業工場に比すると、莫大な相違が存在してゐる。後者は秩序整然として、精巧を極めた大規模な機械的生産であるのに、前者は不秩序極る雜

第一期は……野蠻時代

個人生活の充實の如きは問題に

然とした手工生産に過ぎない。専門學者に倣つて世界の進歩を四階段にすると、第一期は、自然食料を生産資料としてゐる野蠻時代、第二期は、手工生産を主として生活してゐる半開時代、第三期は、機械生産を主としてゐる文明時代、第四期は、人格尊重主義の上に成立つてゐる文化時代である。そして今日は最高の文化時代までに社會は進歩してゐるはずであるのに、その文化人の臺所が、未だに前々期の半開時代、即ち手工時代に屬する状態にあるといふ事は、甚だしい時代錯誤である。

前時代に屬する文明時代に於ては、個人生活の充實の如きは問題にならず、家庭生活の實質よりも外見を重んじた、門構や玄關、客室等をりつばにすればよいと考へ、家族生活に最も大切な臺所の如きは、これを顧みる必要を認めなかつた。それで外部の經濟界は急速な進歩を來したが、内部の臺所即ち家庭生産工場は、二三百

果の多くして生産
少くして生産
出れない

婦人労働も生活
盛んに活動
なければならぬ

いかにして
人力でなければ
ならぬ労働は
これを

年前の手工時代そのままのものとなつて、取残されたものであらう。故に其所で働く生産者即ち婦人は、勞多くして效果の少い生産しか出来ない。彼等は長時間、無趣味な雑務に従事しなければならぬから、自分を向上させる時間の餘裕もなければ、その精神もなく、保守生活に一生を送るのである。

婦人解放運動は精神的方面の活動と共に、卑近な臺所の改造から始めねばならぬ。臺所労働も重要な生産的労働である事が認められる今日である以上は、婦人労働も經濟學の原理に基づき、最小犠牲によつて最大効果を收めようとする經濟主義によつて、活動を盛んにしなければならぬ事は言ふまでもない。さうしてそれが爲には、すべて苦痛が多くして不愉快な仕事は、なるべく機械になさしめ、いかにしても人力でなければならぬ労働は、これを遊戯化するといふ新しい方針を嚴守しなければならぬ。

臺所の改造が
行はれて、調和
が行はれて、一層
が生活が一層
意味深いもの
に意味深いもの
ある

要するに、婦人が生産者として、男子同様の經濟的地位を占めようとするには、根本的にその生産を現代化しなければならぬ。臺所の改造が行はれて、始めて家庭内各種生産業務の調和が行はれ、新しい眞の文化的生活を男女共に楽しむ事が出来ると同時に、社會生活が一層意味深いものになり得るのである。

若しそれ婦人の努力と男子の同情とによつて、一たび臺所が現代的の生産工場に改造され、其所に新知識が盛んに適用されて生産が行はれる場合には、家庭生産の労働も大部分機械化され、勞力と時間とに於て著しい節約を見る事が出来るであらう。その結果として、女子の能力が十分に發揮されるやうになり、従來のやうに男子ばかりの文明であつた文明時代より進んで、男女同等の力で活動する男女協力の文化時代の幸福な生活を營む事が出来るであらう。故に臺所に關する正當な經濟説を十分に理解する事は、單

に婦人ばかりでなく、男子の爲にもまた大なる利益を持来すものであるから、この方面にも文化運動を起す事が、社會改造の爲必要であると信ずる。

二二 母としての日本婦人 その一

鶴見 祐輔

世界の國々を旅したドイツの哲學者カイゼルリンク伯が、日本に來ての數々の印象のうち、彼は日本の婦人を禮讚して、世界の女性のうちに、完全に近きものありとすれば、それは日本の女性である。と言つた。

同じやうな事をラフカディオ・ハーンが嘗て世界に向つて言つた。さういふ頌徳の碑文を捧げられてゐる日本の婦人たちだ。日本の男性は未だ曾て、そんな讚辭を世界の誰人からも受けた事はない。たゞ日本の女性だけが、時をりかゝる禮讚を受けてゐるのだ。

鶴見祐輔
政治家、評論家、小説家、明治十八年群馬縣に生れた。カイゼルリンク(西紀一八八〇年)

さういふ頌徳の碑文を捧げられてゐる日本の婦人たちだ

何人も認めざるを得ない事は、事だ

人によつて……

自分も美しい衣裳を身に著けたいと……

その理由はいろく、あらう。しかし、何人も認めざるを得ない事は、少くとも日本の女性は、世界の他の女性と異なつてゐるといふ事だ。

世界中を旅行した人々に聞いてみる、あなたは日本で何か一番深い印象を受けましたか。と。その答の十中七八は、きつと日本の婦人たちからと言ふ。

その理由は人によつてみんな違ふ。

或人々は、美しい日本のキモノに心ひかれる。

世界のいづこにも類例のない日本婦人の衣裳に陶醉する。自分もあゝいふ美しい衣裳を身に著けたいと、大勢の外國の婦人たちが冀ふ。

或人々は、日本の婦人の身のこなしに神往する。

青疊の上に、白い障子を背景にして、座蒲團の上にかうしとやか

それは一見無
表情であつて
しかも：教養の
流露である

心ある外客を
めして：禮讚せし
めた

に坐つた日本の婦人たちの姿に驚く。さうして自分たちの身のこ
なしが、野蠻人のやうであるのを今更の如く羞ぢる。

或人々は、日本の婦人の表情に心酔する。

それは一見無表情であつて、しかも子細に見れば、二千五百年の
教養の流露である。寶玉は薄絹に包んで、卻つてそのもれる光のゆ
かしいやうに、内に溢れる純情を靜かに抑へて、端然としてゐると
ころに、日本婦人の調和と平和との心境が味讀される。

或人々は、日本婦人の心盡しに感歎する。

陽に虚禮を避けて、陰に温情の流露をつとめんとする日本の婦
道に動かされる。

それ等の一切が、心ある外客をして、日本の女性を禮讚せしめた
理由である。それは多くの場合に、自國に於て失はれんとしつゝあ
る徳操と美とを、外國に發見せんと試みる人間性の一面でもある。

日本の女性ほ
もつてゐるも
のである

國民と國民とが
具有して：築
いて行く

今までの日本は
秘蔵息子であ
つた

他人庭上の花を美しとする心境でもある。しかし、これを印度に求
めず、支那に求めず、アメリカに求めず、ドイツに求めずして日本に
發見するところに、日本の特色がある。

世界の人人々から、かゝる讚辭を受け、かゝる興味を中心となつて
ゐる日本の女性は、或純清な責任をもつてゐるものである。その期
待に反くまいといふ向上心、その評價を裏切りたくないといふ自
重心が生れてこなければならぬわけだ。さういふところに、我々は、
美しい國際競争心を發見する。

國民と國民とが異なる特色を具有して、別々の文化を築いて行
くところに、大きい世界文明の完成が約束されるものとするなら
ば、日本民族が世界文明の大殿堂に對する大きな貢獻の一つは、日
本女性の完成の方向にもこれが見出されるであらう。

今までの日本は、太平洋といふ大きい海の懷のうちに、しつかと

我々は、いかにして、ぬけ出で、入るべきか

我々はいかにして苦惱より光明にぬけ出で、涙より笑の門に入るべきか。それが日夜我々の眼前にある嚴肅な問題である。それは永久に我々が希望を抛たない事である。我々の生に就いて絶望しない事である。我々今日の苦痛は、必ず明日の幸福の因たる事を深く信ずる心を持つ事である。

二三 母としての日本婦人 その二

想ふに日本の女性が、カイゼルリンクとハーンとの歎賞を博したのは、日本の女性たちが、永い間悩みぬき、苦しみぬいて來た結果である。ほゝゑみつゝ、苦しみを忍んで來た日本婦人の靈のうち、或高貴な光が輝いてゐて、それが直觀力の鋭い人々の眼に映じたのである。

即ち、今日の日本女性の美と徳とは、たゞ無代價に天から降つて

日本の女性が、歎賞を博したるのには、結果である

その涙を最も多く日本の女性が流して來たのは、實は母としてである

遺憾なく發揮して

來たものではなくして、二千五百年來の涙の結晶である。



家庭 (筆 藤彦 藤)

その涙を最も多く日本の女性が流して來たのは、娘としてでもなく、妻としてでもなく、公人としてでもなく、實は母としてであると、私は固く信ずる。日本人に偉大ありとせば、それは母たる日本女性の賜である。

我々がこの世の中に生存し、社會を形作つて生活して行くのは、我々一人一人が、人間として完成する爲だ。一人一人がもつて生れた天稟の才を遺憾なく發揮して、人間らしい人間になる事だ。

それをむづかしい言葉でいろ／＼に言つてゐるだけだ。即ち人

人格の完成と
極の事がある
目標である

ローマのさる
大富豪が遺言
だして死んださう

格の完成といふ事が、我々一切の人間の究極の目標である。自由主義といふのがそれだ。故に一切の人間の運動は、一人々々の魂に呼掛けて行く運動である。この事は、宗教家に於て、教育家に於て、文藝家に於て特に著しい。しかし、直接間接の差はあつても、一切の人間は、誰かの靈に向つて呼掛けてゐるものだ。かうして我々は、自分の靈を磨き、同時に他人の靈を磨きつゝ、生活してゐるのだ。

かくして我々は、何等かの痕跡をこの地上に留めて死んで行きたいと希願してゐる。その昔、ローマのさる大富豪が、ローマの共同墓地の中に、一番大きい墓表を建ててくれと遺言して死んださうだ。その墓石を、二千年後の今日訪れ見る人々は、彼の愚かな志を笑ふけれども、私はそこに人間の悲痛な叫を看取する。

我々は誰一人として、このまゝ死んで行きたくはないのだ。何かの足跡を残して死にたいのだ。何かの印象を地上に留めて死にた

宗教家が地上
に死んで行く
からだ

最も生々しい
最も深いもの
だ 愛の烙印

母の思ふの
情操は

いのだ。

その一番大きい痕跡は、墓石よりも、或個人の胸に、自分の人格を刻みこんで死んで行くといふ事だ。宗教家が一番深い存在として地上に残つて行くのは、大勢の人の胸のうちに、烙印のやうに自分の姿を焼附けて死んで行くからだ。

この人格的烙印として、最も生々しい、最も深いものは、母が子の胸のうちに焼附けた愛の烙印だ。その烙印が子孫から子孫へと傳はつて行つて、そこに人間性の地上に於ける不朽の姿が現れる。

それは、母の子を思ふの情操は、利益も、虚榮もない純清な一心なものであるからだ。

もとより母たるの情は、民族と人種とに於て差別はない。しかし、環境と教育とは、人間の性質に深刻な變化を與へる。日本の社會環境は、日本の婦人を驅つて母としての任務に専念せしめ、随つて母

逆に言へば……
言へる

内助といふ事を
日本の男性
たちが濫用し
てゐた

日本の母と子と
の生活と情操

としての情操を洗煉せしめた。故に多くの場合に於て、日本の子供
たちは母に對して燃えるが如き思慕の情をもつてゐるのである。
それは逆に言へば、日本の婦人たちの生活に狭き限界が設けら
れてゐた反映であるとも言へる。

日本の婦人は、内助といふ事をその理想として教へられた。その
内助といふ事を、日本の男性たちがかなり濫用してゐた。男性はど
んな事を外部でしても、妻は内助の徳操にしがみついてゐなけれ
ばならない場合が澤山にあつた。その爲に、不幸な婦人たちは、勢ひ
その子供に對する愛情に最後の避難場を求めてゐた。

勿論、子供に避難し得た事は、日本の女性として感謝しなければ
ならぬ。或外國に於ては、子供をも女性から奪つてゐる所すらある
ではないか。

さうして、こゝに日本の母と子との、特有な生活と情操とが展開

その多くのも
のうちに……
数へたい

東海の一孤島に
はぐくまれて
ゐた

された。それは日本生活中の最も輝ける一面である。

今日本が新しく世界文化の主流中に乗出したに就いては、日本
が世界文化の寶庫に何ものを貢獻し得るかといふ事を、我々は靜
かに考へてみなければならぬ。

その多くのものうちに、私は日本女性の貢獻を數へたいと思
ふ。我々が過去に於て、積重ねて來た美と善との一切を、更に洗煉し、
更に淨化して、これを世界文化の殿堂に捧げたい。さうして、東海の
一孤島にかくの如き文明がはぐくまれてゐたといふ事を、十幾億
の全人類に向つて闡明したい。

私は日本の女性の缺點に就いて盲目ではない。日本の婦人たちが
自ら矯正し、進んで獲得しなければならぬものは數々ある。しか
し同時に、日本の女性は決して失つてはならない多くの美しき清
きものをもつてゐる。その輝ける一つは、母としての情操である。清

清く正しく賢く
而して優しき母

女子新國文 卷八

く、正しく、賢く、而して強くして、優しき母としての日本の女性が、これまで日本の日本を作つて來た力だ。さうしてまた、これからの日本を新しく創造する力である。

(母)

一六四

女子新國文 改制新版 卷八 終

(略名) 富山芳賀女國八

昭和七年五月十七日初版印刷
昭和七年十月五日訂正再版發行
昭和十年十一月八日訂正四版發行
昭和十二年十二月二十日訂正六版印刷
昭和十六年十二月二日訂正七版印刷
昭和十八年七月十四日訂正八版發行
昭和七年五月二十日初版發行
昭和十年六月二十五日訂正三版發行
昭和十二年六月二十八日訂正五版發行
昭和十六年十二月二十四日訂正六版發行
昭和十八年六月六日訂正七版發行

女子新國文 改制新版
定價卷八 六拾錢

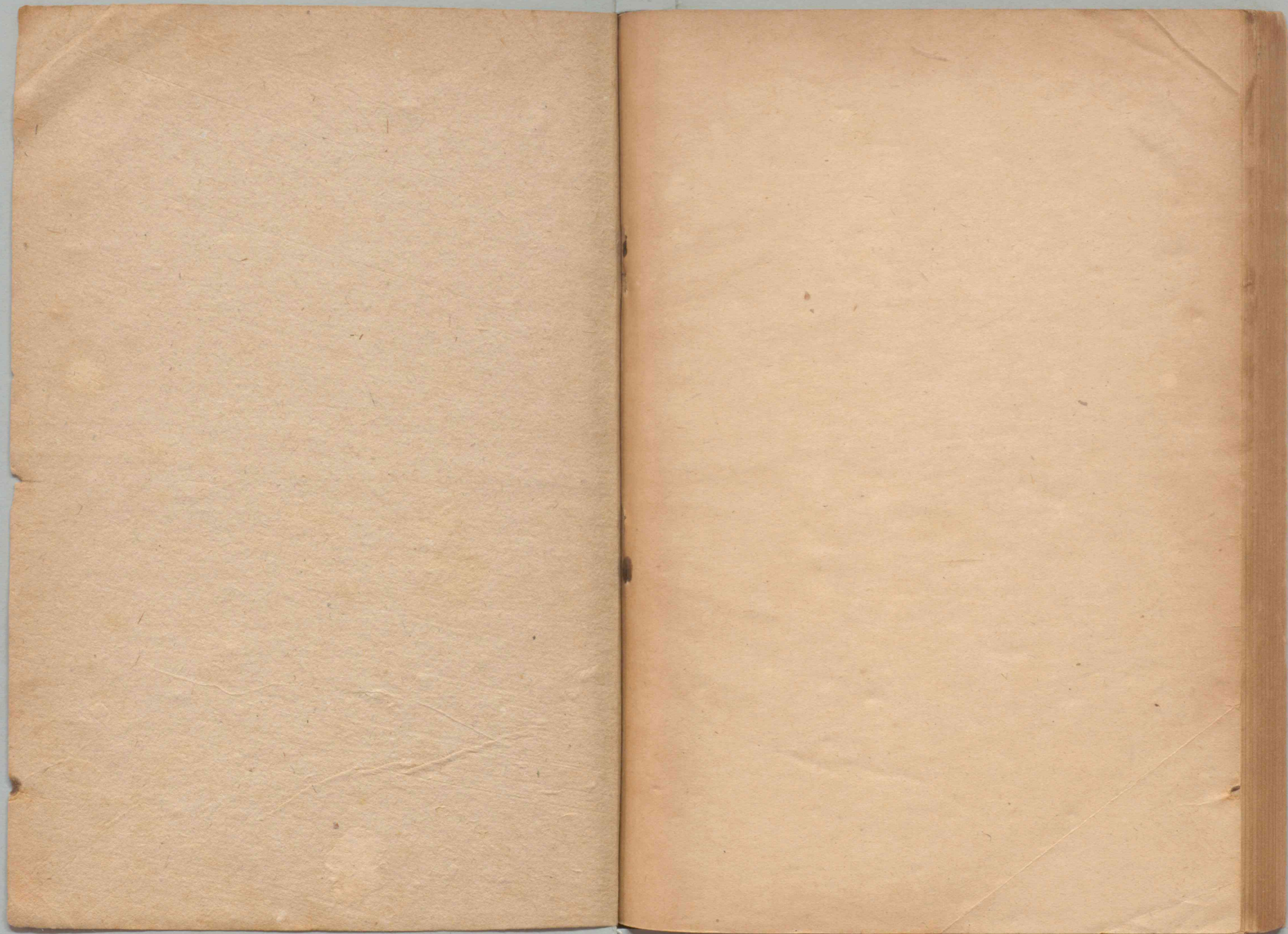


發行所

編者 芳賀 矢一
訂補者 橋本 進吉
發行者 東京都神田區岩本町三番地
中等學校教科書株式會社
代表者 山本 慶治
印刷者 (東京) 大日本印刷株式會社
代表者 寺井藤左工門

東京都神田區岩本町三番地
中等學校教科書株式會社
日本出版會會員番號一一七五二二

配給元 日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町2ノ9



第四學年ノ組

高畑智恵子